

ISSN 2186 – 3989

物語「歌津敵討ち」に関する新史料の発見と紹介  
—越中立山が物語の舞台として重視された東北地方の物語—

福江 充

Introducing a New Historical Source on the Story, *Utatsu kataki-uchi*  
A Tōhoku Tale with an Important Episode Set at Etchū Tateyama

Mitsuru Fukue

北 陸 大 学 紀 要  
第52号(2022年3月)抜刷

# 物語「歌津敵討ち」に関する新史料の発見と紹介 ー越中立山が物語の舞台として重視された東北地方の物語ー

福江 充\*

Introducing a New Historical Source on the Story, *Utatsu kataki-uchi*  
A Tōhoku Tale with an Important Episode Set at Etchū Tateyama

Mitsuru Fukue\*

Received December 20, 2021

## Abstract

*Utatsu kataki-uchi* relates a tale of murder and revenge that occurs in the village of Utatsu, in the township of Minami-Sanriku, Miyagi Prefecture. When the parents of siblings Ofude and Jūjirō are murdered, the children search for the killer with the assistance of their great uncle, Jihei (a.k.a. Tarikibō). Ultimately they are able to take revenge on the criminal, Matsuoka Mondo (a.k.a. Mikumo Danjō).

In 1995 the folklore scholar Kawashima Shūichi identified eleven recensions of *Utatsu kataki-uchi*. Since then, in June of 2020 another recension sold on Yahoo's auction website, and more recently this author acquired an additional recension, bringing the total number of known manuscripts of the story to thirteen. This article introduces and transcribes the complete text of the most recently discovered recension in order to make this source available for new research.

Key Words : *Utatsu kataki-uchi*, Etchu Tateyama, Tateyama Beliefs

## はじめに

立山に関わる文学作品を題材とした、これまでの研究及びその成果は、廣瀬誠氏の著作『立山のいぶきー万葉集から近代登山事始めまで』<sup>1</sup>と富山県〔立山博物館〕の企画展開設図録『文学にみる立山』<sup>2</sup>の2冊に概ね網羅的に取り上げられ、集約されている。

しかし、そこから洩れた作品も多少見られ、例えば、十返舎一九の『越中楯山幽霊邑讐討』や本読みテキストの「歌津敵討ち」などがそれに当たる。前書については、本紀要の第49号<sup>3</sup>で翻刻と史料紹介を行い、第50号<sup>4</sup>では考察も済ませているので、本稿では江戸時代の敵討ち作品の継続的な紹介として、後書の「歌津敵討ち」を取り上げたい。

折しも筆者は、2020年10月にこの「歌津敵討ち」の冊子を宮城県石巻市の個人（古物商）からヤフオク！を通して購入した（写真1～写真33）。表紙はなく、32丁立ての袋綴（紙縫綴）で、大きさは縦28.0cm×横16.5cmである。

---

\*北陸大学国際コミュニケーション学部 Faculty of International Communication, Hokuriku University

もっとも、筆者は購入当初からこの冊子が「歌津敵討ち」だと認識していたわけではない。表紙がないこの作品の 1 丁目冒頭に「三人廻国東西別れの事、附、越中立山因縁物語の事」と、初章の題名を見つけたので、筆者はこれを越中立山に関する何らかの史料と考え、立山信仰史研究のための参考史料として購入したのである。後に筆者が富山市内の書店で偶然、川島秀一氏の『「本読み」の民俗誌—交叉する文字と語り』に目を通した際、その中に「歌津敵討ち」の内容が含まれており、自分の購入した前掲冊子の内容と一致する部分も多かったのが、それが「歌津敵討ち」であることを知った。

そこで、「歌津敵討ち」について研究史を見ていくと、これまで、前述の川島秀一氏や西田耕三氏によってテキストの発掘や紹介、分析などが行われている。具体的には次の論文や著書が刊行されている。川島秀一「語り伝えと書き伝え—「歌津敵討ち」をめぐる—」『口承文芸研究 第 18 号』（16 頁～32 頁、日本口承文芸学会、1995 年）、西田耕三『歌津敵討物語』（地域史学研究会、1996 年）、川島秀一『「本読み」の民俗誌—交叉する文字と語り』（59 頁～94 頁、勉誠出版、2020 年）。

川島氏によると、講談本はその多くが版本であるのに対し、「歌津敵討ち」という本の形態は「書き本」（写本）がほとんどであるという。「歌津敵討ち」のテキストは、川島秀一氏の調査で提示された 1995 年時点での 11 冊と、2020 年 6 月にヤフオク！に出店・落札された 1 冊、そして筆者がヤフオク！を通して最近入手した 1 冊を合わせて、合計 13 冊が認められる。

川島氏によると、前述の 11 冊の「歌津敵討ち」のテキストのうち、江戸時代に成立した作品は、天保 2 年（1841）の写本だけであるという。一方、ヤフオク！で見かけたテキストと筆者が購入した前述のテキストはいずれも直筆であり、冊子の形態や近世文書の字体及び文章の言葉遣いなどより、江戸時代から明治時代半ば頃までの成立と推測される。

さて、本稿では、現存 13 冊の「歌津敵討ち」のうちの 1 冊である筆者所蔵の作品を全文翻刻しておきたい。

## 1. 「歌津敵討ち」のテキスト

「歌津敵討ち」のテキストの現存状況については、川島氏前掲書のなかで整理されている。それによると以下のとおりである。

### 【江戸時代】

①「（表題欠）」（写本、天保 12 年〔1842〕、宮城県南三陸町（旧・歌津町）の高橋静男氏所蔵。奥書に「于時天保拾貳歳閏正月写之」と記載されている）

### 【明治時代以後】

②「奥州歌津敵討全」（写本で明治 10 年代に制作されたと推定されている。宮城県気仙沼市長磯浜・守屋敬亮氏所蔵。幕末、明治初期に本吉郡長磯村〔現、気仙沼市階上長磯〕に転住してきた仙台藩士で筆道職の木戸有義が所持していた写本（「木戸有義本写本」）を歌津町上沢出身の小野寺惣衛氏がさらに写記したもの）

③『歌津仇討夢舂之枕』（活版本、明治 25 年〔1892〕、日新館発行、宮城県登米市登米町入谷・須藤俊夫氏所蔵）

### 【昭和時代以後】

④「歌津仇討孝子お筆重治郎」（ガリ版刷り本、昭和 4 年〔1929〕、宮城県南三陸町（旧・歌津町）・高橋静男氏所蔵）

⑤「歌津仇討物語—孝子お筆重治郎—」（ガリ版刷り本、昭和 10 年〔1935〕、気仙沼市立図書館所蔵）

⑥「歌津仇討夢墜枕の巻の壺」（昭和 10 年〔1935〕、『郷土の伝承』第 3 輯所収）

- ⑦「歌津仇討夢艸之枕」(昭和 10 年〔1935〕)
- ⑧「歌津仇討夢艸之枕」(昭和 37 年〔1962〕)
- ⑨「歌津仇討古老繹」(昭和 56 年〔1981〕)
- ⑩「歌津敵討ち書」(昭和 60 年〔1985〕)

【平成時代以後】

- ⑪「歌津仇討夢惣之枕」(平成 5 年〔1993〕完成)

この他、以上のテキストの翻訳文や翻刻文を掲載した著書に、西田耕三編『歌津敵討物語』(地域史学研究会、1996 年)がある。その具体的な内容については、西田耕三氏による「現代語意識・歌津敵討物語」(明治 25 年〔1892〕の活版本である登米日新館蔵版本を底本として意識したもの)や「登米日新館蔵版本・歌津仇討夢草之枕」(明治 25 年〔1892〕の活版本である登米日新館蔵版本)の翻刻文、「木戸有義本写本・歌津敵討夢想之枕」(「奥州歌津敵討全」〔写本で明治 10 年代に成立したと推定される。宮城県気仙沼市長磯浜・守屋敬亮氏所蔵。木戸有義所蔵本からの写本と伝えられている〕)の翻刻文が掲載されている。

## 2. 「歌津敵討ち」の構成と前半から後半前までの内容

前述のとおり、「歌津敵討ち」の翻訳文や翻刻文を掲載した著書に、西田耕三編『歌津敵討物語』がある。その中に収められたテキストのうち、「歌津敵討ち」の物語内容が最も広く、且つ多く掲載されているのは、「木戸有義本写本・歌津敵討夢想之枕」(以下、本稿では略して「木戸有義本写本」と表記する)である。参考までに同本の章立てを見ておくと、次のとおりである。

- (1)「松岡主水、治右衛門女房江執心の事」
- (2)「松岡主水、治右衛門夫婦を殺害并主水が行方を失ふ事」
- (3)「倉内浜より治右衛門が死骸を送る事 附御検使到着の事」
- (4)「墓参り白石咄の事 附姉弟勇気の事」
- (5)「二児観音祈誓の事 附伯父多力坊廻国兄弟に逢ふ事」
- (6)「多力坊、二児を誘へ(ひ)出国の事」
- (7)「笠島老母霊夢の事 附三人安堵の事」
- (8)「笠島門弟支(試)合の事」
- (9)「笠島兄弟の者江極秘を伝ふ事」
- (10)「三人廻国東西別れの事 附越中立山因縁物語りの事」
- (11)「於羽州に兄弟、伯父坊に逢事 附伯父坊病死の事」
- (12)「秋田三吉兄弟を導く事」
- (13)「螳螂雷頭、易を以て弾正を諫ること」
- (14)「重治郎兄弟、弾正主従働きの事 附主従討死の事」

一方、「筆者所蔵本」の章立ては次のとおりである。

- (1)「三人廻国東西別れの事、附、越中立山因縁物語の事」
- (2)「於羽州兄弟、伯父坊に逢事并伯父坊病死の事助」
- (3)「秋田三吉、兄弟を導く事」
- (4)「螳螂雷頭、易を以て弾正を諫る事」
- (5)「重治郎兄弟、弾正主従働きの事、附、主従討死の事」

以上、両冊を比較すると、「筆者所蔵本」の各章の題名については、「木戸有義本写本」の 10 章から 14 章に概ね該当していることがわかる。

さて、ここでひとつ指摘しておきたいことがある。すなわち、前述のヤフオク！を通し

て購入した「筆者所蔵本」と、もう 1 冊の別の作品は、本来、両冊で一揃え、もしくは、さらにもう一冊別の冊子が存在し、3 冊で一揃えだったのではないかということである。

「筆者所蔵本」は 2020 年 10 月に筆者によって落札・購入されたものであり、もう 1 冊は表紙に「歌津敵討夢想之枕」の表題を持ち、2020 年 6 月 24 日に入札が開始され、2020 年 7 月 1 日に落札されている。両冊とも比較的近い時期に出品・落札されており、さらに両冊の出品者は Yahoo! JAPAN ID から同一業者であることがわかる。「筆者所蔵本」の法量は縦 28.0cm×横 16.5cm であり、内容は前述のとおり「木戸有義本写本」の 10 章から 14 章に該当し、32 丁立て（64 頁）である。一方、もう一冊の作品もオークションの出品情報によると、法量が縦約 28cm×横約 16.5cm であり、全部で 56 ページ程あるという。さらに、その内容は「木戸有義本写本」の第 1 章目から始まっている。「木戸有義本写本」の章立てからすると、5 章で約 30 丁（60 頁）程の分量であり、以上の点から考えると、「筆者所蔵本」ともう 1 冊の「歌津敵討夢想之枕」の冊子は一揃えであるか、あるいはさらに別の 1 冊が存在し、3 冊で一揃えだったと考えられる。

ところで、「筆者所蔵本」においては、舞台や登場人物の性格、経歴、事件の発端など、物語の前半から後半前までの内容が欠如していることになる。そこで、筆者所蔵本の翻刻を行うにあたり、同本には掲載されていない「歌津敵討ち」の 1 章から 9 章までの内容を押さえておきたい。

#### （1）「松岡主水、治右衛門女房江執心の事」

承応 2 年（1653）、陸奥国仙台本吉郡歌津村に百姓・上沢治右衛門とお房（26 歳）の夫婦が暮らしていた。治右衛門は慎み深く、情け深く、学問にも精通していた。治右衛門とお房の間には、お筆（12 歳）と重治郎（10 歳）の二人の子供がいた。

さて、もと会津の浪人で、2・3 年前から歌津村で剣術を教えていた松岡主水が、お房に恋心を抱くようになった。しかし、彼女が全く相手にしてくれないので、松岡の心の中では、愛が憎しみに変わり、怨み心が深まっていった。

#### （2）「松岡主水、治右衛門夫婦を殺害并主水が行方を失ふ事」

松岡主水は小泉村と歌津村の間の堀切という小沢で、治右衛門を惨殺した。その後、松岡は治右衛門宅に押し入り、お房も惨殺した。松岡は二人の子供たちも殺害しようとしたが、子供たちは間一髪隣家に逃げ込んで助かった。子供たちから話を聞いた隣近所は大騒ぎになった。近隣の人々で松岡の行方を探索した。

#### （3）「倉内浜より治右衛門が死骸を送る事 附御検使到着の事」

倉内村の百姓・半助が堀切で治右衛門の遺体を発見した。すぐに倉内村の肝煎が実況見分のために現地に呼ばれ、遺体は歌津村の治右衛門であることが判明した。肝煎は、倉内の組頭に命じて遺体を歌津村に移送した。一方、歌津村では治右衛門宅が松岡主水に襲われ、妻のお房が惨殺されて大騒ぎになっていた。歌津村の肝煎や組頭が集まって治右衛門の帰宅を待ち侘びていたところに、今度はその治右衛門も惨殺されていたことが伝えられ、一層大騒ぎになった。治右衛門夫婦殺害事件は代官所へ伝えられ、すぐに松岡主水が容疑者として浮かび上がったが、当初は確証がなかった。その後、小泉村の茶屋の証言から松岡の犯行と断定された。治右衛門夫婦の遺児は代官の命令により、親類と村の人々がみんなで協力して養育することになった。治右衛門夫婦の遺体は茶屋にふされ、7 日ごとの法要が懇ろに勤められた。

#### （4）「墓参り白石咄の事 附姉弟勇気の事」

治右衛門夫婦の遺児・お筆と重治郎の姉弟は、亡くなった両親の初盆を迎え、墓参りに

出かけた。道すがら筆は重治郎に白石敵討ちの話しを聞かせ、自分たちも心を合わせて、松岡主水に敵討ちすることを誓った。

#### (5) 「二児観音祈誓の事 附伯父多力坊廻国兄弟に逢ふ事」

治右衛門の祖父・治太夫はかつて江戸に出て、細川越中守の屋敷で奉公していた。治太夫は浅草の観世音菩薩を深く信仰していた。ある日、昼の奉公に差し障らないようにと、夜間に浅草観音を参拝したが、屋敷の門限を破ることになってしまった。そこで、忍び込めそうな掘堀から屋敷内に戻るが、運悪く夜廻りの者に見つかってしまった。この違反行為により治太夫は死罪に処されることになった。太刀取り（執行人）が治太夫を斬ろうとすると、不思議なことに太刀は三つに折れてしまった。驚いた検使と太刀取りが、この状況を細川公に伝え、細川公は治太夫を召し出し、直接事情を尋ねられた。治太夫がこれまでの観音信仰の経緯を話した。すると、細川公は大いに感心し、治太夫への死罪を解いて許した。治太夫は観世音菩薩への信心を肝に命じて古里に帰った。自分の屋敷内に御堂を建て、観世音菩薩を安置した。治右衛門はそれから3代目の当主であった。そのような家の由来のもと、お筆と重治郎の姉弟も松岡主水への敵討ちが果たされるよう、観世音菩薩に一心不乱に祈った。

ところで、治右衛門の伯父・治兵衛は先年駆け落ちして行方不明であり、周りからは既にどこかで亡くなっていると思われていた。しかし実際には治兵衛は浪人となり、血気盛んに諸国を流浪していた。その治兵衛も歳を重ねるにしたがい、古里に残した父母や兄のことを思い出し、不孝の罪科を懺悔するようになった。治兵衛は阿弥陀如来の本願に帰依し、多力坊と名乗って諸国を廻国し、四国、西国、伯耆の大山、富士山、浅間山、越中の立山、出羽の羽黒山などで修行した。さらに恐山での修行を志し奥州を目指していたが、11月下旬だったので取り止めた。古里の歌津村が懐かしくなり、同村を訪れた。多力坊は撞木で鉦を打ち鳴らし、南無阿弥陀仏と声を張り上げて托鉢した。

一方、お筆と重治郎は、屋敷の外から南無阿弥陀仏の念仏の声（多力坊の念仏の声）がしてくるのを聞いた。お筆は重治郎に、今日は両親の命日なので、声の主の僧侶を自宅に宿泊させることにしたいと告げた。そして、家から出て門の前に立ち、修行者（多力坊〔治兵衛〕）に今夜一晩、我が家に宿泊してもらえないかと呼びかけた。呼びかけられた修行者（多力坊〔治兵衛〕）は、その家がかつての我が家であることに気づくが、その様子はあまりにも変わり果てていた。多力坊（治兵衛）は声をかけてきた子供たち（お筆と重治郎）に、彼らの両親のことを尋ねると、既に亡くなってしまっていることを知った。多力坊は子供たちから、両親が亡くなった経緯を聞いて驚き、堪えきれなくなり、自分は子供たちの父・治右衛門の伯父の治兵衛であると告げて、正体を明かした。お筆と重治郎にとっては大伯父である。

さて、お筆・重治郎と治兵衛がこのたび巡り逢うことができたのも、ひとえにこれまで信仰してきた観世音菩薩の御利益と思い、三人は一緒に松岡主水への敵討ちを果たすことを決意した。ただし、松岡主水は名の知れた強者なので、子供ではとても敵わない。そこで三人で江戸に上り、良い剣術の師匠のもとでしっかりと修行をしたのちに、敵討ちを行うことにした。治兵衛たちは旅の用意を始めた。

#### (6) 「多力坊、二児を誘へ（ひ）出国の事」

多力坊とお筆・重治郎の姉弟は歌津村を出て、江戸に向かった。江戸の浅草に到着した夜、多力坊と姉弟は長年信仰してきた観世音菩薩の夢告を得た。夢の中に観世音菩薩が天童と現れ、もし彼らが敵討ちを果たしたければ、明朝、浅草観音堂の右手で休んでいなさいと告げた。さらに、四つ時60才ぐらいの老女が現われ、その女性が敵討ちを果たすための便利になると告げたところで、夢は覚めた。三人ともこの夢告に大いに感動した。



(7) 「笠島老母霊夢の事 附三人安堵の事」

江戸の中の窪に笠嶋主膳という剣術者がいた。笠嶋家は剣術家として数代続き、奉公を好まず浪人でありながら、大名・旗本衆へ剣術を教えて富み栄えてきた。主膳の老母は浅草の観世音菩薩を深く信心し、60歳になっても月参りを行っていた。

さて、老母は観世音菩薩の御縁日の前夜に夜籠りをする予定だったが、同夜、観世音菩薩の夢告を得た。観世音菩薩が天童と現れて告げるには、おまえの子供が田舎から上京し、私を祀った堂の側に休んでいるので、おまえが世話をしなさいとのことであった。そこで老母は翌朝沐浴して数人のお供を召し連れ、浅草へと急いだ。浅草へ向かい、そちらの方を見ると、60歳ぐらゐの僧侶が幼少の子供を労っていた。老母は、まさに観世音菩薩の夢告の内容だと思い、彼らに近寄ってどこから来たか尋ねた。多力坊は奥州より上京したと応えた。老母はこれを聞き、多力坊らに江戸での滞り場所の有無を尋ね、彼らがないと応えたので、三人を自分の屋敷に連れて行くことにした。

一方、多力坊ら三人も、先の観世音菩薩の夢告の内容と老婆の出現が割符を合わせたように一致したので大いに悦び、老婆に一礼をして、それより老婆に随って中の窪へと急いだ。中の窪まで来ると立派な屋敷があった。屋敷から中間が出迎え、老婆を見て平伏した。老婆は多力坊ら三人を屋敷の門前で休ませ、その間に自分は中間二人に誘われて屋敷の中に入ってしまった。しばらくして中間が戻り、三人を屋敷の中に連れて行った。そこには足洗風呂が準備され、さらに中間が黒羽二重の小袖を持ってきて三人に着せようとした。三人はこの待遇に驚き辞退するが、中間は老婆の命として三人に強引に着せ、老婆の前へ連れて行った。老婆は三人を見て、先の観世音菩薩の夢告のとおり三人の大望と何か機縁があると感じ、周りの者を退けて、三人に自分が得た夢告の話をした。その内容を聞いた多力坊は、昨晚得た観世音菩薩の夢告の内容と老婆の話しが割符を合わせたように一致したので、これまでの経緯や昨晚の夢告のことを老婆に包み隠さず詳しく語った。老婆は大いに感動し、その後も様々な話を語り合ってから就寝した。

一方この日、笠嶋主膳は、旗本大久保軍左衛門の屋敷を訪れ、夕暮れ頃に帰宅した。主膳は、そう言えば母が、今日は浅草参詣に出向き旅人を迎えると話していたのを思い出し、ご機嫌伺いのため母方に出向いた。母は大いに喜んだが、その一方で旅人を連れてきた理由を曖昧にしていることに對して気に懸けていた。主膳は母にそのような気遣いは無用だと言った。それを聞いた母は、主膳に頼みたい一大事があると言って、周りの人たちを押し払った。母は主膳にこれまでの観世音菩薩の夢告からの経緯を話した。そして主膳に、この度迎え入れた二人の子供は、今後主膳自身の子供と思って養育し、敵の松岡主水を討たせるために剣術修行に精進させてやって欲しいと言った。母は、そうすることによって、一つには彼らのためになり、二つには観世音菩薩の尊意にかない、三つには母への孝行になるので、なにとぞ手助けして欲しいと言った。元より主膳は孝行義信の人物であったので母の願いを承諾した。

(8) 「笠島門弟支（試）合の事」

笠嶋主膳はお筆と重治郎の姉弟を自分の子供として養育し、剣術はもちろん習字や学問までも指導した。笠嶋家に入ってから3年が経ち、お筆は15歳、重治郎は12歳になった。二人とも剣術の技術も自ずと磨かれてきて、身軽な様子は鳥のようであった。主膳はこれまでの修行方針で大丈夫だとは思っていたが、なんと言っても敵は強い勇士だと聞いているので、絶対失敗しないために、二人にはまだまだ未熟と伝えて修行に励ませた。

主膳の高弟の上島源八郎は剣術の達人で、同門には彼と肩を並べる者がいなかった。一方、お筆は容色艶やかで、江戸での暮らしに馴染んできたので、お洒落も自然と万人が好むスタイルになり、さらに剣術や裁縫なども覚えてきたので、彼女に言い寄る者も多くな

ってきた。とりわけ上島はお筆のことが好きになり、度々その思いをぶつけてくるので、お筆は、今ではすっかりもてあますようになった。お筆は、自身の武勇に高い誇りを持つ上島に恥辱を与え、再び言い寄れなくしてやろうと思った。しかし、両親の敵討ちという大事に対して、これはあまりにも小事である。そこで上島の使いの者には、「お気持ちのとても懇ろな事は私の身に余り、ありがたく、とても嬉しいことです。しかし、不義はお家の御法度（禁止された行為）であり、どれほどお気持ちをいただいても、叶わないことです。なにとぞお許しください。この末、再び言い寄られましても、私ももちろんあなた様のためにもならないでしょう」と、言葉に道理を含ませて、伝言を頼んだ。上島は自惚れ心が強く、お筆の丁寧で優しい断りの伝言を、自分を嫌っているからではなく、師匠の手前と世間を気にしているからだとか都合良く解釈し、さらに一層激しくお筆をいろいろ口説くようになった。しかし、どうしても上手くいかないで、そのうちお筆に対して大いに立腹し、お筆のことを嘲るようになった。そして恥をかかされたと思うようになり、お筆と弟の重治郎に報復する機会を狙っていた。

さて主膳は、お筆・重治郎姉弟の腕前を本人たちに自覚させるため、また弟子の稽古を奨励するため、或いは弟子の強弱を見極めるため、門弟を集めて二手に分かれて試合を開催することにした。強者は励みになると言って喜び、弱者は歎いた。上島はこうした機会を望んでいたので大喜びし、明日こそ姉弟を打ちのめし、日頃の怨みを晴らしてやろうと試合日を待ちわびていた。

試合当日、主膳の高弟・上島は、今日こそ怨みを晴らそうと思いながら出発した。あとに主膳の弟子の荒井郡次郎、花房左近、左嶋左馬の助らが群をなし、誠に壮観な様子であった。弟子たちは、強者と弱者を織り交ぜて双方に分かれ、木刀で勝負を行うことになった。

主膳は最初に、門弟の何となく改まった様子を見て指示を出した。今日は左右に別れて勝負をするが、それは各々の励みにするためであって、仮に弱者が強者に勝っても、また新参者が古参者にかつても、それはその時の試合のなかでのことであり、前々から言っているとおり、道場での勝負の内容を末々の遺恨にしてはならないと命じた。それを聞いて門弟はみな平伏した。

それより門弟たちは二手に分かれ弱い者たちから仕合を始めた。すると上島は我慢でなくなり、師匠の主膳に、お筆・重治郎の兄弟と試合をさせてくれるように申し出た。すると主膳は理解できない様子を示し、次のように言った。さて未だ高弟たちの試合については弱い者たちの部門であり古参の技術の高い者たちの部門ではない。なぜ、みだりにしゃしゃり出て試合を望みたがるのか、その目的がわからない。この師匠の言葉に対して上島はしばらく当惑したが、すぐになにくわぬ様子で、師匠がおっしゃられるような特に深い意味はなく、ただ、お筆・重治郎の兄弟は僅か4・5年の間の修行しかしておらず、その技術は自分たちには及ばないでしょう。そこで、試合をすることによって強さと柔軟性を学び、一層修行に精進してもらえることを願うからだと、言葉巧みにごまかして答えた。しかし主膳は再び答えることはなかったので、上島はそれならば兄弟の相手になろうと心をはやらせるが、師匠の手前もあり控えていた。その時、轟源蔵が木刀を取って試合を求めたので、出番を待ちかねていた重治郎も会釈もせず立ち上がり、いざ参ると言って切りかかった。双方が打ち合うなかで、轟は木刀を打ち落とされ、その後も組掛かろうとしたところを、師匠の主膳に勝負見えたりと声をかけられたので、無念ながら座に戻った。続いて上島の従兄弟上島源十郎が重治郎と対戦したが、まともな重治郎が勝った。これを見て上島源八郎は堪えきれなくなって、自分が重治郎の相手をすると言って立ち上がると、お筆が不肖ながらお相手するとて木刀をとって立ち上がった。上島とお筆は互いに秘術を尽くして戦い続けるが、途中で主膳が両者に引き分けを宣言し、両者は左右に分かれた。試合のあと、主膳が二礼を済ませると、当日の勝者たちは勇みながら、敗者



たちは不興な顔で自宅へ帰って行った。上島源八郎も帰宅して衣服を着替える際、懷中より筭が出てきた。これはどうしたことかと惘れたが、そのうち状況が理解できた。その筭はお筆が試合中に上島の間を見て、懷に投げ入れたものであった。それを考えるとお筆の武芸はとても自分が及ぶものではなく、試合が引き分けに終わったのも、自分が主膳の高弟なので、お筆が敢えて引き分けにしたのであった。その証として筭を投げ入れたのである。上島はこれまでのお筆に対する行為を恥じた。

#### (9) 「笠島兄弟の者江極秘を伝ふ事」

主膳は今日の道場での試合において、お筆が、主膳の高弟の上島に勝つだけの實力を持ちながら、あえてそれをせず、武芸で勝る証として上島の懷中に筭を投げ入れたことを高く評価した。そうした相手を慮る心といい、武芸といい、主膳は、お筆と重治郎の姉弟が幼少にもかかわらず、4年から5年の修行で古参の弟子に勝ってしまうほどの實力を身につけたことこそ、まさに觀世音菩薩の御加護によるところであり、このことを悪く言う者はいないと思った。したがって主膳は、姉弟に秘術を伝授しようかと考えたが、これについてはかねてより上島が強く望んでいることなので、もし新参者の姉弟には伝授し、上島には伝授しなければ、恨みをもたれて争いになるかもしれないと思った。そこで3人の知恵を計ったうえで伝授するか否かを決めようと思った。主膳は3人を上島、お筆、重治郎の順に自宅の奥の座敷に呼んで試したが、上島にはこれまで以上に心の修行に心がけるように命じて伝授を認めずに帰した。主膳は、お筆と重治郎の姉弟には、彼等が兵法の奥義である自分の身を慎み、他者を慮ることができており、その武術と心の成長を認めて自分の秘術を残らず伝授した。

主膳は母のもとへ出向き、お筆と重治郎が5年間の修行で武術はもちろん敵や鬼神さえも欺く勇氣を身につけたので、敵討ちに失敗することはないと伝えた。母は喜び、主膳の判断内容を聞いて、姉弟を早く敵討ちの旅に出発させるように言った。母は敵討ちの際の晴れ着として、事前に麻黄羽二重に白綸子の小袖3人前を用意していた。さらに刀は浪平行安を、また脇差は丹波守道を用意しており、刀は重治郎に、脇差はお筆に渡した。また多力坊には青井下坂の刀を渡した。さらに母は3人の旅費として、懷より金子100両を取り出して渡した。主膳はこれまでの5年間、姉弟の敵の松岡主水が江戸に潜伏しているかもしれないと思い、武家や町屋から情報を集めていたが、未だ有力な情報はなかった。したがって、江戸表で松岡の行方を探索する必要はないと感じていた。多力坊は、松岡が世を忍ぶ浪人なので、彼の生国である会津に潜伏しているとは考えていなかった。そこで、京都や大坂の方面を探索することにした。多力坊とお筆・重治郎の姉弟は主膳の妻や息子からも選別をいただいた。主膳の母は、多力坊ら3人を誘って浅草観音へ参詣し、敵討ちの成功を祈った。その後、3人は敵討ちの旅に出発した。

### 3. 手書き本「歌津敵討ち」（福江家所蔵）の翻刻

以下、筆者が所蔵する手書き本の「歌津敵討ち」を翻刻しておきたい（以下、本稿では「筆者所蔵本」と表記する）。下線部は筆者所蔵本と「木戸有義本写本」を比較した部分である。下線部上の斜体フォントで記載された（ ）内は「木戸有義本写本」に記載された用語・文章である。下線部の用語・文章のうち、比較・分析する際、特に重要だと思われる箇所にはAからQの記号を付与し、フォントをゴシック体にして示した。文章中の漢字については、両書を比較した場合、同音異語も見られるが、本稿では「歌津敵討ち」が語り物のテキストであるので、表音だけに留意して敢えて指摘していない。

## 【1 丁目表】

三人廻国東西別れの事、附、越中立山因縁物語の事

去程に三人の者共は、先、東海道を尋ね、程なく京都至りしが、爰に暫く逗留し、所々方々を尋ると云へ共、敵の行衛も知れざれば、京都を打立、大坂に越て、爰にも月日を重ね、  
ゆがり  
由縁を求めて尋ると云へ共、更に知れざれば、是より山陰・山陽・南海・西海を尋んとせ

しが、<sup>まで</sup>待(待て)暫し、我が心々程、遠国を尋ね近国を尋ねざる事(は)過ち也。是よりは引返し、年の内も余日無れば越年し、明なば其許共、兄弟一手に成り、北陸道を尋ぬべし。我は壱人にて中山道を尋ね、奥州にて出会【以上 1 丁目表】致さんと云に、御筆・重治良も其義然るべしと一決し、先、京都に返り、と(返り梟。)ある所に年(春)を迎ひ(へ)、春立帰る(記載なし)朝に成れば、早打立んと旅の用意ぞ(を)なしに梟。伯父の日(同く)、若互に逢ずして年月を送らば、何国にてか生死も知れず。然らば当年も過ぎ、来る年(来年)も逢ざる時は、江戸中の窪へ集るべし。是互ひ(互)の永く行違はざる為也と、委細の事を教訓して(記載なし)両道にこそ別れ梟。夫より重治郎兄弟は(記載なし)、伯父の教へに随ひ、近江路より越前・加賀・能登に(を)懸け(記載なし)廻り、爰に一月、彼所に二月と滞留して、所々方々を尋ね(尋る)と云へ共、松岡が行衛知れざれば、越中に打越(て)(記載なし)、所々【以上 1 丁目裏】を(記載なし)尋ね、其後、御城下富山に暫し足を留しが、当国立山大権現は靈山成る由、是へ参詣して大望成就を祈り、猶、父母の後世を祈るべしと、立山の麓に至れば、頃は霜月中旬にて寒風烈敷折柄成れば、常躰の者は山に登る者壱人もなし。去れ共(去共)、厭はず心を金鉄の如くになし、登り百九十丁の所を漸々と登り参詣し、下向の折、空かけ雲りて雪降(降り)、日も暮るれば、兄弟手に手を取て急ぎ梟。風烈敷吹、雪を散らして道も見得ず。殊に前々降積りたる雪の中に落入て、姉は弟に助けられ、弟は姉に引上られ、危き所を漸々(記載なし)遁れ、麓【以上 2 丁目表】に下る。然れ共、在家甚(甚だ)遠ければ、今宵は此所にてここへ死に成らん、斯靈山の麓にて死する事は、善縁の端成れ共、幼少より粉骨細身したる甲斐も無く、本望を遂ずして雪中に空敷成らん事、誠に以て口惜や。今少しも(記載なし)勢を出して行成らば、山賊の家也共、又は(記載なし)乞食の木屋(小屋)成共有べし。急がせ玉ひ姉上と(よと)、互に勢を出し梟。詠れば、遙か(遙)向ふに燈火見得ければ、兩人見付、大に悦び、先々あれへ参り一宿頼み申さんと立寄見れば、柴庵室(柴の庵室)也。内には大勢の声聞ゆれば、重治郎怪み(怪しみ)、是程纔<sup>ハツカ</sup>かの庵室、殊に山中に大勢

女(大勢の女)の声聞ゆるは(ゆれば)不審とは思【以上 2 丁目裏】ひ共、惣身冷通(通<sup>ひ</sup>り)、空腹成れば、先、不審成れ共絶難く(絶難し。)、門を音信るれば(音信ければ)、内より四十歳(記載なし)斗りの尼僧立出、答て日(日く)、夜中と云、大雪に、唯今何方より御出と云ければ、兩人手を付て、成程、私共は今日、上の権現様へ参詣の戻り懸、雪降閉ければ、夜に入既に(既)命も危く存候所に、火の光りを見るより、漸々気を取直し参りて(参て)候。哀れ御情に一宿下され度段願ひければ、其座に有つる尼僧共立出て、扱は左様に候か、然らばさぞ手足こ々へたらん込、洗足を出し雑炊を拵ひ(拵へ)、皆々能きに痛わり梟。良有て、重治郎申様、扱又、此山中(内)に大勢尼僧方(尼僧の方)御集【以上 3 丁目表】候は、如何成故に候やと尋ね(尋)ければ、最前門を明たる尼僧答へ(答て日く)、成程、御不審は御尤、此庵主は私(私)斗り、外は諸国の集り人にて候。此庵に冬籠りに来り。春は八方へ立別れ候也と語り梟。其後、四方山の物語と(記載なし)なすに、お筆は草伏梟にや休息す。然るに(休息し、然に)、重次郎は当年十六歳、長器

量。十九、廿と見得ければ、庵主を始、皆居たる女中共、言葉を揃へ、扱、其（お）身達は御（記載なし）連衆にて何方より何方へ何の御用にて当国へ御廻り候やと尋梟。重次郎も如何答んと、挨拶に迷惑せしが、急度皆の心を合点し、成程、御尋御尤に存奉り候（奉存候）。私共元は（は）江戸の【以上3丁目裏】者に候が、恥かしながら、是成女と聊か（記載なし）不義有て據なき故、国を立退候と云へば、皆々言葉揃へ（言葉を揃へ）、私共、先刻より左に有ら（記載なし）んと存候と云。然に、其夜休みしが、お筆何となく身骸力なく、絶入る（記載なし）斗りに成ければ重次郎始め皆々驚き、薬を含め痛みしが、漸々氣を取直し、皆々案堵成し候得共、夫れより床に打伏、中々出立成り難ければ、重次郎、是に甚だ氣を痛めしが、庵僧（庵主）始め（記載なし）皆々云様、此寒風では中々御出立思（記載なし）ひも寄ら（記載なし）ず、当冬は私共と一所に越年し、来春一度に打立候得と、皆々痛み云しかば、姉も重次郎も、是に少し力を得て心を【以上4丁目表】慰め、夫より庵主折々在家へ下り、医者と呼ばひ、心置なく看病せしが、今は自然と全快なし梟（記載なし）。斯て、光陰矢の如く、年も暮、正月にも成りければ、諸国の（記載なし）集り尼僧共は暇乞して八方へ別れ梟。重次郎は姉の病氣（病氣を）、未だ（記載なし）然と致さざる故、補養して、暖和の節打立んと跡（跡へ）残りしが、有時、庵僧申様、誠に不義の御人方に非ず。如何成子細が有。御明し候得。数日（斯）御馴染候上は、聞て（應）御不為には相成申まじ。御生国は武州と仰られ候得共、全く左様（左様に）是有間敷候。御言葉の内、何とやらん奥州弁是有候得ば、定め（記載なし）て御生国は奥州に候（候半）。早（記載なし）包まず御明し【以上4丁目裏】候得よ。自分事も身の上咄し申べし。お筆、取あへず、左様成らば御身様より先に御明し候得と云へば、成る程、人の先祖を聞時は、我が（記載なし）先祖より名乗る（記載なし）と云。自分誤り（記載なし）候也。誠に子細も恥か敷（し）ながら、是も仏の懺悔に（為に）候得ば、御咄し申也。元、私は奥州仙台本吉郡清水と申所の者にて、私が夫は源十郎連、此上も無き極貧者にて、今日の煙りも絶々に暮し候が、或時、源十郎、海辺に出A. にても流れ来り候やと（記載なし）、詠め居る所に、向ふより何やら黒き者流れ来る（来れり）。いづか（江豚）、真黒の類成かと悦び、立寄り見れば左に非ず、人の死骸也。こわ如何にと驚きしが、いや待暫し、我【以上5丁目表】ヶ程貧苦にせまりて（記載なし）露命も斗難し。此衣類を剥取、我ら（我々）が露命を安んじ申（記載なし）べし。幸ひ、<sup>あた</sup>辺り（旁）に人も無し。能、幸ひ（記載なし）と、死罪（「骸」の誤りか）を引寄せ見れば、着たる物は皆八丈丹後嶋成れば大（大い）悦び所に（記載なし）又、腰に財布有（有り）。解て是を（記載なし）見れば数十金の重く有り（有）。先、人に知ら（記載なし）れん事を恐れ、て早く彼（彼の）死骸を沖中へ突出して、飛で我が家（我家）へ立帰り、彼財布を解て見れば、過分の金子有り。夫婦諸共大に悦び、是正敷天の授け玉ふ宝也と、夫より俄に家を作り、大船、漁舟限らず（漁舟に限らず）、其外、気仙沼へ店を出し、内には奴婢余（数）多召懸（遣へ）、俄が分限成れば、諸人怪み、源十郎如何成事【以上5丁目裏】成れば、五六年以前より仕出すと怪む事こそ理り（道理）也。去れ（記載なし）共、跡を譲るべき子供無れば、夫婦（夫婦は）是のみ諸神に誓ひ（記載なし）を頼み（祈り）暮し梟に（記載なし）、程なく懐胎せし故（に）、夫婦の悦び大方成らず、一月二月も志とけ無、終に月満、玉の如くの男子を生り。家内・親類悦ぶ事限り無し。其名を民次郎と号し、乳母に（記載なし）付添、痛み（居）梟に、四つや五の時よりも器量骨柄長度敷（長敷）父母の窮愛浅からず。早七つの春に成りしかば、所の配所へ手習に遣し梟に、如何成る器量の生れにや、一字を書ては（聞て）十字を知り、十字を学で（学んで）百字を語り（語り）、八才にして四書を極めしかば、師道の悦び大方成らず。然【以上6丁目表】に、手習休息の間には、余所の子供は悪い事を致し遊ぶに、我が（記載なし）子・民次郎は遊ぶ隙にも横笛に心を寄せ、休息の間、是を吹に次第に（自然と）妙を得て、飛鳥も羽を休め、走る獣も足を留む。況や人に於おや、

音を聞者感ぜずと云者（事）無く（し）、親類他人に誉られし（讃られし）は、親の心に（記載なし）如何斗り（斗りか）嬉敷、我が（記載なし）年の老たるを忘れ、指を折て待に、甲斐なき（遠き）無常の殺気誘ひ来りて（来て）、あへ無き別れとなりしかば、夫婦共に絶入斗り（記載なし）、暫し正気は無し覺。親類縁者立寄りて野辺の煙となし覺に、我々は夢共無限（うつつ）共なく泣暮し、商売家業も打忘れ、譬へ元の源十郎【以上 6 丁目裏】に成る（記載なし）由も、今度我子民治郎に逢だひ者と、是のみ思へ（ひ）し折柄に（記載なし）、表に称名の声して修行者来りしに、余りの歎きに挨拶もせざりしに（せざるに）、修行者不思議に思ひ、内に入て我らに（記載なし）云様は、扱先刻より門に立、手の内を乞しに、挨拶も無（なく）、いと歎き候は、如何（如何成）事と尋ねければ、其時漸々涙を払へ、扱は左様に候か。御尋ね（記載なし）御尤、ヶ様ヶ様の別れに逢、夫故に（逢故）、斯の通り歎き候。猶更御身は法師の事成れば、御存（御存ず）是有べし。我々（我々が）死たる子に、此娑婆にて逢る（ふ）者成らば、B. 教へ玉ひと、泪と共に申覺。修行者聞て御歎き尤也。去ながら老少ふ定の（金錢はおろか少しも厭ふまじ。併無定の）世【以上 7 丁目表】中、返らぬ事に候得共、左程（ほど）（左程に）食事も打（御）忘れ御歎（御嘆き）候はば、是より遙か隔り候越中の立山は日本一の亡者の集り所と承り候。此山へ参詣なされ候はば必ず必ず恋敷子に逢事も有べし。併ら（記載なし）逢由も（記載なし）由無き事候得ば、是より追善には劣る事にて候が、左様（程）思ひ立せ玉ふ事成らば、御登り候得。安き事に候と云。夫婦大に悦びて（記載なし）死たる我が子に逢成らば、等（など）か万里を厭へ申さんと、修行者に色々馳走して返し覺。家内（夫より家内）の事は、支配人、親類に頼み、夫婦諸共に（記載なし）廻国順礼と成て、此山へ（に）登り、奥の院に参詣せしに（して）、日も（記載なし）七つ下刻に成りぬれば、今宵は此山に一宿【以上 7 丁目裏】して、何卒我が（記載なし）子に逢ん由、山八分にイミ居たる（り）。折しも烈風頻りにして、如何様共凌ぎ難く、何方此方と思へ（ひ）しに、暗夜の事成れば如何様（如何様共）行べき方もなく、あわや此所にて同じ冥途の夜道成らんと覺悟を極めし折節、火の光見へければ、是幸ひ（幸）と近寄り見れば（ければ）、僅かの庵室也。夫婦大に悦びて音信（記載なし）に、内より四中（四十）斗りの出家者立出、御身達は夜に入、何方より御出に候や。覺束無し、子細有らんと御尋ね（記載なし）有ければ、包まず（今は包まず）始終の次第ヶ様ヶ様と（次第を）物語れば、僧聞て、夫れ（記載なし）は親子の情合にて候得共、親と成り子と成り生る事、誠に（記載なし）深き縁成共、是【以上 8 丁目表】に善惡二つ有り（記載なし）。親を養ひ、後世を弔は宿縁也。汝等の如く莫太の恩（思ひ）をなし、親に先達て返つ（記載なし）て歎きを懸る事、逆縁也。何ぞ左程慕ひ歎く事有らん。併ら（記載なし）、さ程こがる（懂る）事ならば、今宵汝等が子も此所に来るべし。去共（尤、其）対面はならず。我衣（我衣の）影に居（記載なし）て容子を見るべし。必ず我が（記載なし）子よ、親よと名乗る（記載なし）事無れ。我教を用ずして名乗なば（名乗りなば）、返て害に逢べし（逢ふべし）と教玉ひ（へ）ば、夫婦は泪を流し、如何に御僧様、我々は恋敷子を見ると聞、身命を惜まず（じ）是迄参り候に、逢ば返て害にならんとは、如何なる事にて候と云は、御僧答て、善縁悪縁とは爰の事【以上 8 丁目裏】言葉で凡夫の知れ難し。只今其理明らかに知るべし。最早丑三つにも近ければ、押付ヶ（記載なし）亡者も来るべしと云内に（記載なし）、山震動して竜男竜女の声致しければ、すわやあの内に我が（記載なし）子の声もするらんと（するらんと）、耳をそば立聞所に、余多の声の内よりも（記載なし）、横笛の音、遠く聞ゆれば、猶々耳をすまし（すまして）聞所に、我が（記載なし）子、娑婆に有し時吹しC. 音に違わず。（横笛の音遠く聞ゆれば、猶々耳をすまして聞所に）飛（記載なし）立出んと思へ共、御僧引留、今の笛の音は、慥に汝等が子成るべし。必ず出る事無れ。出る時は害とならん。我が（記載なし）衣の内に身を潜め居るべし。彼れ（記載なし）見付る（記載なし）事能わず。汝等、我が（記載なし）衣の影より能々見るべし。後に思へ（ひ）知るべし。夫迄



は我が(記載なし)言葉を慎めと【以上9丁目表】仰られければ、夫婦、言葉に随ひ居たりしに、横笛の音、近く寄りて、内に入(入る)を見れ(見聞く)ば、我が(記載なし)子也。気もそぞろに飛出んとせしを、御僧堅く禁め、暫く有て、亡者、僧に向へ、今日此所へ娑婆より人来る(来たる)べし。包まず教玉ひ、と云へ(記載なし)ば、僧の曰、左様の者、且て参らずと云。亡者押返して、いやいや来るべし。其時、御僧問て曰(曰く)、汝、左様に深(深く)尋候は定め(記載なし)て子細有ら(記載なし)ん。聞くまふし(聞かまほし)と云ば、其時、亡者、怒る(れる)顔色にて云様は、元私し(記載なし)は、大船の船頭し(に)て、諸国へ通行致候所、凌(凌ぎ)難(難き)難風に逢、舟を揉崩されしが、今は是迄と覚悟を極(極め)、新ら敷衣類を身に【以上9丁目裏】重ね、金を腰に付け(記載なし)、海上に身を投しに(じて)、何卒陸に浮まん(浮ん)と思ふ念力に(思、念力に)、何方此方と漂流せしに、漸々仙台領本吉郡に付しが、源十郎と云者見当り、衣類金子を剥たぐり(剥取)、骸をば海上に押流し、骸は徒に鯨鰐に懸られ、魂は六道の街に迷ふ。此故に如何にもして此恨み(記載なし)を報わん(報ぜん)と思ひ共、其便り(記載なし)を得ず。然るに(記載なし)幸ひ(記載なし)、彼れ(記載なし)に子無く、日夜愁る(愁ふる)事を知り、子と生れて害をなさんとせしに、流石は親子の情愛に曳れて、恨みを報わず(報ぜず)。此上は死て思ひを取ら(記載なし)すべしと存(存じ)、空敷なるに、是にて少し念散す。然(然る)を修行【以上10丁目表】者と変じ、是迄導き候得共、只今此所へ(に)来らざるこそ不審也と、怒(怒れる)眼は逆様に裂、おぐれの髪はそふに立、さしも柔和成姿、忽ちしんいの鬼とぞなりしかば、其時御僧、何か呪文を唱へ(ひ)しか、心鬼和らぎ失に覺。扱、夫婦の者共は、希意の思をなし、冷汗を流し居たる(り疊)に、御僧、衣の中より二人を出し、扱、各方、只今見聞の通り(記載なし)なれば、是より菩提を弔ひ、彼れ(記載なし)にも成仏させ、汝等も共に成仏し玉へと、尊き事(尊御事)共御物語遊ばせしかば、額(顔)を地に付け(付)居たるに、いつと(いつとも)無く心身勞れ寝入しが、朝嵐の木末に伝ふ音につれて目を開て見れば(目を開き、見れば)、庵室に非ず【以上10丁目裏】して、山八分に伏し(記載なし)居たり。

夫婦は顔を見合て、こは如何なる事と<sup>あきれ</sup>愕しが、夢にもせよ実にもせよ、我が<sup>あきれ</sup>子らが脾腑に合へ(記載なし)し事成れば、大に悲し(み)歎きしが、夕の御僧こそ(法)、我が(我等)多年念じ奉る地藏菩薩成らんと御跡を(記載なし)伏拝み、下向し覺。夫より源十郎、何と無病氣にて、色々介抱せし甲斐も無く、終に病死せしかば、泣々此所に葬り、自ら(自分)も同じ道にもと思ひしが、責て菩提を弔らわん(弔はん)と、此所に庵(庵り)を結び、壹ヶ年の間諸国の尼僧達が宿をせしと、始終の事を泪と共に語りければ、重治郎・お筆も云覺は、今は我々も(は)何をか包み申さん(可申哉)。私共は御推察【以上11丁目表】の通、御近所歌津村の治右衛門が子供に(にて)候也と語れば、定めて(記載なし)大望の為、御修行に候か、始終の事は近所の事故、存居候。誠に梅檀は二葉より香ば敷と云へ(記載なし)。御幼少にて斯大望を(の)思へ(ひ)立し(記載なし)は、流石に治右衛門殿の御子息達也。自らも去冬より御容子を見上げ(記載なし)常躰の方とは【以下は欄外への挿入文書→D、存ぜず候得共、斯御近所の御人方とは思へも寄らずして居り候也】(存ぜず候へ共、斯近所の御人方とは思ひも寄らずして居候也。)敵の居所、御心当も候哉と尋ねければ、去ればにて候、数年江戸に居、其後、京都・大坂を(と)尋ね(記載なし)しが、敵に廻り逢ず。夫より伯父と手分を致(致し)、伯父(伯父様)は中山道を相廻り、拙者共は越前・加賀・能登を相尋ね(記載なし)、爰に相廻り候。此後は出羽・奥州を志し候と云へ(記載なし)ば、尼僧答て、成程、其義【以上11丁目裏】然るべし(可然候)。三ヶ年以前、私共、故郷に罷在之(候)砌、風聞には、治右衛門殿夫婦を殺害せし松岡主水、其後、奥州岩谷堂にて、人の女房に恋慕し、其夫を殺て(殺して)、其(記載なし)女を引連れ(記載なし)、秋田とやら津軽とやら山奥に引籠り、盜賊の頭をして、

南郡、秋田の近辺をおびやかし、路地の狼藉の由、諸人申候。若、諸国を御尋遊され候ても、行方知れずんば、此辺を御尋候得。併て(記載なし)敵は強勇殊に盜賊也。悪党共随ひ(へ)候得ば、随分謀を廻らし仕損じ無き様、専用に存候と、具に語れば、兄弟悦び、扱は左様に候か、偏に権現の御告也と大に悦び、夫より日を経て、姉も全快なしければ、永の【以上 12 丁目表】別れを惜みつつ、東路指て趣き(急ぎ)ける。

於羽州兄弟、伯父坊に逢事并(附)伯父坊病死の事助

斯て重治郎兄弟、尼僧の介抱にて、危き病の苦み(苦しみ)を助り、越後路に趣き尋ければ共(尋けるに)、敵の有家も知れざれば、夫より会津に趣き覺に、当国は上杉弾正忠様御領地、殊に敵の生国成れば、若や名を替、姿を改め居る事も有らんかと、御城下在々を尋廻り候と云へ(記載なし)共、曾て様子も知れざれば、先、米沢に出、夫より羽州山形の御城下に付、爰に一兩日逗留し(して)、諸国(方)を窺ひ覺。然る所(所に)、同宿脇座敷に病人有り(記載なし)と見へて、【以上 12 丁目裏】医者日々出入せしが、兄弟亭主

に問て曰(曰く)、隣り座敷の病人は何方の御人に候哉。只(只今)さへ旅は憂<sup>うき</sup>つらき習へ(記載なし)にて、増て御連も無(無く)、独此所にて悩み玉ふは、無々(嗟々)御心細思召ならんと尋ね(記載なし)ければ、亭主聞て、御身様方は御年若に見得候に(が)、左様急頃にて御尋下され候段、御奇特千万に存候。元此人は武州江戸と申されしが、此頃病氣甚敷重りしが、私を呼て申様、某は最初江戸と名乗候へしが、全(全く)左様に非ず。本国は奥州仙台本吉郡歌津村の者にて候所、身に大望有て廻国仕候所、不幸にして今此所に於て大病を引受、冥途の旅へ趣き【以上 13 丁目表】候事、年に不足は無と云へ(記載なし)共、大望を遂じずて(遂ずして)死する事、何より以て口惜く(記載なし)候と斗

り(記載なし)、跡は泪に成候と語れば、兄弟は驚きて(記載なし)、其人は俗人にて候か、亦僧にて候か、年の程(程は)、幾程と問へ(記載なし)ければ、亭主答て申様、成程姿は山伏と見へて、年は六十斗り(記載なし)の人也、と云へ(記載なし)ば、兩人(兩人は)大に驚き、其人こそ我々が伯父にて候と云へば(云。)、亭主は大に悦び、左様成らば先々対面候得と、彼の(記載なし)座敷へ伴へば、病人は高枕に懸り居たりしが(居たるに)、兄弟は側らに(側に)寄て、如何に伯父様、筆・重治郎にて候。御目を開かせ候得と云へ(記載なし)ば、伯父坊目を開きて(記載なし)、式人の顔を見るよりも苦敷息を突ながら、珍らしや重【以上 13 丁目裏】治郎・恋しのお筆(珍らしや恋しきお筆、重治郎)、先、様子は如何にと尋れば、さん候方々を尋ね(記載なし)廻り候得共、曾て様子も相知れず。其上に越中にて姉が病氣にて数日(数月)逗留仕り、夫故に伯父様の御先途も遅なわり、御看病も仕らず、甚々(甚だ)不幸千万也と、泪ながらに手を付けければ、夫は苦しからず。其許共(記載なし)恙なき事(記載なし)こそ嬉しけれ。我れ(記載なし)既に歳六十に及びぬれば、死する共(事)、何ぞ愁んや。只其方共の先途を見届けざる事(記載なし)こそ口惜けれ。去ながら、汝等兄弟に廻り逢ふ(記載なし)事は、尽せぬ血筋也。随分と身を堅固にな(記載なし)して、堪忍を専用とすべし。我は(記載なし)其方共と約束せし如く、中山道を経て奥州【以上 14 丁目表】に越んとせしに、俄に当国の湯殿山を思へ(ひ)出し、何卒して今一度参詣なして(記載なし)、大望成就を祈り、E.(猶行末を伏拝み、)猶其元(記載なし)共と一所に(一緒と)成らんと志し、信州の善光寺を参詣なし、夫より越後の高田へ出、此所迄来りしが、凌ぎ難き大病を引受、既に冥途黄泉に趣んとするの劔り、今其方共に対面せしは、偏に権現の御引合せ(記載なし)也。去共、敵を尋るには上方には心当更になし。奥の方こそ床しけれ。必ずぬかるな、油断すな。伯父は冥途に趣く共、魂魄は止りて、行末猶も守るべしと云も、苦敷だんまつま。



是を（記載なし）此世の一句（一期）とな（記載なし）して、終に空敷成りに梟。兩人（兄弟）は十方に暮て此年【以上 14 丁目表】月（月のうきつらき）、杖共又柱共頼み（頼みに）思へ（ひ）し伯父に別れ、如何成らんと悲め（悲しめ）共、歎きて返らぬ事成れば、先、亭主を先に立て（先立）、碑名を立、野辺の煙りとなし（なして）、七日七日の追善供養をいと念頃に當て（當みて）、此所に三十日程も逗留なし、夫より打立、秋田の御城下に着しが、爰に（記載なし）暫く足を留め、武家町家へ縁を求め（記載なし）て窺へしが、曾て様子も知れざりける。

秋田三吉、兄弟を導く事

去程に兄弟は秋田の御城下に逗留成し（して）、敵の様子を尋れ共、更に知れざれば（しれず）、此上は津軽へ打越、若又夫にても知れざる時は、縦令松前・蝦【以上 15 丁目表】夷地（夷地）也共尋出さで置べき（し）かと、足を限りに尋行しが、津軽への入口にて路に踏（記載なし）迷へ（ひ）て、秋田にても隠れなき大判平と云深山にこそは（記載なし）迷へ梟。去れ（記載なし）共、元より（記載なし）深山幽谷も厭わざる事成れば、少しも驚かず。猶山深く登り行しが、日も西山に傾きしに、何と無く心細く、是より人辺へ出んと向方此方と吟へ（ひ）しが、元より大山の事成れば、日は次第に暮懸り（梟が）、F. 詮方尽て居る所に、身の丈は七尺余りの男、其容跡善顔にして、眉緑に其色（記載なし）

天人の如くにて、身には木の葉を纏ひ、手には（記載なし）八角の棒を付て、忽然と顫れ出しかば、兄弟は大に驚き、身構ひ（記載なし）をすれば、此大【以上 15 丁目表】男笑て曰、汝等驚（驚く）事無れ。我は此大山（山）に久敷住む秋田三吉也。汝等が道に迷ひ来る事を察して、教戻さん（教へん）為に来りたり（来る也）。去ながら、汝等が身の上には（記載なし）定めて、供に天を戴かざるの仇有べし。包まず語るべし。語る時は汝等が為に（と）成るべし。包む時は害と成らんと云ければ、兄弟は（記載なし）猶々（猶）驚き（記載なし）て、此人如何成る故に、我等が（記載なし）路に迷（迷ひ）、殊に兄弟成る事を知り（知て）、其上大望有るの（記載なし）事迄も委敷知る事、誠に凡人にては有べからず（ず）。打明す時は便り（記載なし）と成らんと思へ（ひ）、ひざま付て、成程、拙者共、生国は仙台領本吉郡の者にて候が、七ヶ年以前、松岡主水と申武士【以上 16 丁目表】に両親を殺され（討れ）、夫より敵を討んと存、諸国を廻国仕る也（仕候也）。御身様（記載なし）は常体の凡人成らず也（記載なし）。何辛不便と思召、敵の行衛を教へ玉ひ（へ）と、泪ながらに申ければ、三吉答て（云様）、去ながら汝等何程尋ると云へ（記載なし）共、其敵を尋出す事は（記載なし）叶ふまじ。其敵（其敵こそ）今は名を改め三雲弾正と称して、津軽領に隠れ無き大山高田が嶽に引籠り、盜賊を業となして、百余人の悪徒共を随ひ（へ）、八方へ分散な（記載なし）して隣国の財宝を奪へ（記載なし）取、豊に暮して居梟（候）也。汝等是を討事能わず。討時は民の助けと成れり。去れ（記載なし）共、容易の敵に非ず。彼れ（記載なし）百余人の手下を持、其身は天文運氣（天文気）に通【以上 16 丁目表】じ居ながら、吉凶を考へて（記載なし）、常に乱世の事耳をそば立る曲者也。殊に又、彼れ（記載なし）が隨身に蟬螂雷頭連、彼れに劣らぬ英雄有り。中々自力の及ぶ所に非ず。敵を討度事成らば、先、津軽の岩城山へ参詣なし、神力（壮力）を借て本望を達ずべし（達しべし）。我れ（記載なし）助力する事は安けれ共、元より殺害を好まず連、二人を引提、路中（通路）へ投出して、三吉は山へ罷（山奥指して）帰り梟。兄弟は始めて夢の覚たるが（覚めたる）如く、忙然として惘れ梟。姉（姉は）、重治郎に（姉は重治郎に）向て申様、只今の人は音に聞（聞き）及びず（し）、秋田三吉と云ふ者（人）也。此母（此の人の母）は人を害ひ破（殺傷する）事を好み、三吉は酒を好て（好みて）人を傷る（傷）事を（記載なし）好まずと云へり。如何様【以上 17 丁目表】にも教

に(教へに)随ひ、是より津軽へ打越へ(記載なし)、岩城山へ参詣なし、神力加護を祈ん(祈らん)と急げば、程なく錠が関を打越へ(記載なし)て平手の城下に付(着き)しかば、数日の逗留も無く、岩城山へ(へこそ)は急ぎ覺。元来(元より)、此山(此の山)は登り百七拾丁の大山成れば、麓に別当百沢寺と云所(云ふ寺)有り。是へ参りて案内を乞(乞ひ)、権現様(権現様へ)参り覺に、其(其の)造営の結構さ(記載なし)は、金銀珠玉をちりばめて、中々(申に)言葉に尽されず。爰に於て兄弟は、七日の間、肝胆を碎き、誓を袖にて(結んで)、心願を込(込め)、打立ん(打立たん)とせしに、重治郎、姉に向へ(向へて)、我々け(其)様に武士の姿にては、返って敵に見頭わざる(見現さる)べし。然れ(ら)ば是より形を改め、巡礼の姿と成べし。老つには觀世【以上 17 丁目裏】音の力を得、二つには敵を謀に(討に)便りよからんと、夫(これ)より大小を(は)渋紙に包み、補陀らくの詠歌を唱へ、高田が嶽には(高田が嶽の麓にこそは)急ぎ覺。程なく高田が嶽の麓に至りて、絶頂(絶頂を)遙かに見上れば(見上げれば)、山の中程迄雲懸り、幾有句と云(言ふ)事も知ざれば(なし)、実に酒吞童子が住居せし、丹後の国成る千丈が嶽も斯やと思へ知られたり。去れ(る)共、少も(少しも)氣を屈せず、さしもの高山へ(に)よち登る(登る)に、元より人倫通わねば、路通も無く、殊に九月下旬の事成れば、山々は雪降積り(雪降り積りて)、皆白妙と(に)成りて、何れが路と云(云ふ)事を知らざれば(なし)、迷(迷ひ)暮して如何してか(でかして)、敵き(記載なし)三雲が住家へ行くやしや(べきやと)案じ覺(案じけるに)。殊に大山の事【以上 18

丁目表】成れば、谷底へ(に)転<sup>ころ</sup>び落(落ち)、こゝひ死に(寒死に)逢(逢ふ)事も知れじ(ず)と大に(大いに)惘れ果たる(果てたる)所に、麓の方より廿歳斗りの男、息を切らして懸上る(懸上るに)。兩人も立上り、如何成者成るや、斯る大山へ(に)只一人にて来やと(参るとは)怪む所に、彼男云(伝ふ)様は、扨御身方(達)兩人は(記載なし)何故此所に来らるし(参る)や。此の山に(記載なし)は鬼神盜賊住居して、斯て(行きて)再度返らざる山也。早々御返り候得と云へば、重治郎答て(答へて)、扨は扨様(左様)に候か。御身は又行て再度(行きて)返らざる山へ何故老人登り候やと云へば、去れば我れ(記載なし)旅人に非ず。此山の盜賊の大將(記載なし)三雲弾正が家来にて候が、彼れは(が)手の者百余人有り(記載なし)。先日より八方へ分散して働きに出た(記載なし)るに、某は大將の(記載なし)随一【以上 18 丁目裏】の臣下蟬螂雷頭の手に加わ(記載なし)り候得しに(候へ共)、彼常に天文易学に達し覺に、昨夜何やら怪敷夢

を見たり。定めて(し)主人をつけ狙ふ者有也(あらん)。我れ(記載なし)急に行んと(行かんとは)思ひ(記載なし)共、(密かに退くことならず)八方へ(に)手分(手分<sup>まこと</sup>け)したる人数も引纏<sup>まこと</sup>わず(引まとめず)。我れ密に退く時は、大に手分(多分に)乱るべし。汝、是より急(ぎ)に立帰り、此(此の)趣きを主人へ(に)達し、共に用心を致すべし。我も後より引返して行べしと使者を蒙りて参り候(参る者)也。若(若し)、御身達が(記載なし)行時は、再度返らず。是より御戻り(帰り)候得と伝へば、扨は左様に候か、拙者共は廻国修行の身の上にて、此上の嶽々、人倫の通わざる山(山こそ)、猶

奥深く駈廻り候。縦(譬へ)、此山へ登り候共、何と(んで)三雲殿【以上 19 丁目表】も我々を害し何(何ん)の益が有ん(益あらんや)。又殺さる々(殺さる)共、是又悪縁也と明らむべし。是よりまぬがれんと里に(を)下り候得(記載なし)共、け様(ケ様の)雪降(降り)候得ば、G. 里へ下り着定めて雪中にこゝへ死に成らん逆も、行も返るも同じ道に候得ば(記載なし)、何卒御身の御(記載なし)主人(主人へ)御一言御通じ下され。今宵一宿明させ候はば、明日は殺さる(殺さる)共、何の恨み(何んの恨みも)有

んや。共に（共々）同道致（致し）度（度く）と云けれ（云へ）ば、彼（彼の）男の曰（曰く）、各方（各々方）を<sup>ツ</sup>の害に成らん同道致す（する）時は、主人の心に叶ひ恩賞に預ると云共、各方（各々方）の害に成らん（なる）事を恐る。然れ共、行（行く）も帰るも同じ道と仰（仰せ）られ候はば、是非に及ばず。御出（御出で）有れと先に立て（立って）、暫く急ぎ行（行く）に、早数十【以上 19 丁目裏】丁登り舩に、又谷の様成所を越へ舩に、向ふの木の影より楼門見へければ、彼の男、あの門（門こそ）、三雲弾正が（の）住家成る（り）由、先に立て（立って）急ぎしが、早、彼の（記載なし）男を見失ひ、兄弟は大に驚きて、爰彼所と尋るに、終に見当らず（見失へ）。兄弟希意の思（思ひ）をなして（記載なし）、是正敷人間にては有べからず（非ず）。岩城山大権現、我々が（を）H. 道を失ひしを（記載なし）導き玉ふ者哉（なるか）と、弥々信心肝にめいじ、岩城山の方へ向ひ、猶行末を祈り宛、門に近寄り（近付き）見るに、築地高くして嚴重の構へ也。兩人近寄りて（兄弟近付いて）門を音づるに（音信に）、内より小男老人出て（出で来り）、何国より来るぞと問ひければ、扨拙者共は廻国修行の者にて候が（記載なし）、【以上 20 丁目表】諸国の山々嶽々を志し、当国の岩城山夫（記載なし）より南部の恐れ山（恐山）の方を心懸参り候所、余中にて道を失ひ、此所に（記載なし）迷へ入（記載なし）候也。

最早身骸（身体）も勞れて（疲れて）絶入斗り（記載なし）に相成り候。哀<sup>あわれ</sup>御主人へ（に）此事を達し（達しべし）、御救（へ）下さるべしと云へば、成程主人へ（に）達しべし。其間此所に（ここに）扣ゆべし（控えよ）由、内に入（入り）、先（先づ）ひもぢ（づ）からんと飯を喰せ、又暫く有て女（女中）来り。式人を伴へ奥に行く。然るに向ふを見れば（るに）大に（大いに）隔ちて（へだてて）、上席（上座）に大将<sup>ゆき</sup>三雲弾正と見へて、緋毛せんの上に鈍子の敷蒲団を敷（敷き）、左右には廿歳斗（斗り）の美女を置（おき）、盃を和へて（控へて）居だり舩。兄弟は此（此の）由を見るよりも（記載なし）、ゑひ（ええ）己れ松岡主水、只一討とは（記載なし）思へ共、さ有【以上 20 丁目裏】らぬ舩にて、遙か末座に平伏なす（なし、）。三雲弾正、二人に向て（向って）申舩ば（記載なし）、如何に兩人、此（此の）山は人倫の通ふ所に非ず。何故此所へば（に）来るやと云へば、其（其の）時、重治郎答（答へ）て、我々（記載なし）、日本国中の山々嶽々を懸（馳）廻り、終に廻国修業者と相成（成り）、秋田より打越へ（し）岩城山へ参詣し、南部の恐山を志し候が、当国にも隠無大山成れば、一見せんと存（存じ）登り候が、返て（返って）道を失ひ、日は西山に傾き身舩勞れ、如何（如何が）はせんと存る（存ずる）所、御屋形を見付け候（記載なし）て、死て（死んで）再度（二度）生た（記載なし）る心地にて、一宿を願（願ひ）奉る所、早速御承引下さる段（なり、）、誠に生々世々（記載なし）、有難（難き）仕合に存（存じ）候と慇懃に演（のべ）ければ、弾正聞て（聞いて）、成【以上 21 丁目表】程さも有らん。其方共（そこもと）の生国は何国の者にて候や。殊に（殊に）年も）未だ廿歳にも過（過ぎ）さるに、何唯（何故）廻国修行出たるやと言へけれ（ければ）。重治郎答て、御尤に存（存じ）奉り候。拙者共、生国は武州江戸にて候が、此成女と聊かの不義是（記載なし）有て（あって）、此（その）為に（記載なし）人を悩め據無、国を立除き（立退）候が、近国は追手を恐（恐れ）、斯遠国迄落延（延び）しが、路金も遣ひ（使）<sup>わた</sup>果して（記載なし）、余義無順礼と相成候て（成り下って）、在々町々にて諸人の（に）手<sup>の</sup>を（の）内を乞（乞ひ）、夫を道の助となし、夜を昼<sup>ひる</sup>として（を

ついで) 是迄は (記載なし) 落延 (延び) 候得共、後より追手来りなば、今日にも知れぬ命にて候 (候と、)。泪ながらに物語れば、流石の弾正と (記載なし)、ふわとのり、扱は (扱ては) 左様に候か。【以上 21 丁目裏】世の中に色は思案の外より出る連、誰が身の上にも有べきに、我も若き時 (時は)、色の為に (記載なし) 人を害し據なく斯る深山に引 (立) 籠りて、今は百余人の手下を随へ、身は深山に住 (住へ) と云へ共、福貴栄花は心の俛也 (記載なし)。汝等も左様に世を恐る々者成らば、我に随ひ此山に住 (住む) べし。是、世を忍ぶ身の随一の (絶好の) 所也。重治郎謹で (謹んで)、願わくは尊意 (御尊意) に随ひ (へ) 申也 (さん) と云ば (言へば)、弾正、又曰く、汝等譬へ返ると云 (言へ) 共返されず。然るに幸ひ我に随ふ事 (事こそ)、神妙の至り也 (記載なし)。是より主従の名乗りをせん (いたさんと、)。夫より (記載なし) 女共、盃、と云 (言ふ) も果 (果て) めに、弾正が前 (前に) 指出せば、弾正吞て (吞んで) 重治郎にさせば (差し)、謹で (謹んで) 頂戴なず (し、)。夫より盃順【以上 22 丁目表】に廻り、逆に廻りしが、然れ共、重治郎兄弟は兼て酒は吞ず (吞まず) と云て (言って)、合の間に少し宛 (づつ) 用ひ (呑み) し、弾正は元より大酒にて、殊に今宵は賓客を設げ (もうけ) 悦び (記載なし) の余りに (記載なし)、さへ (い) つ、さ々へ (れ) つ、餘 (数) 多の女共を相手となし、酒に酔に及んで云 (言へ) 梟ば、我、盜賊をなして (業として) 深山に住と云へ共、心は常に雪月花に興を催し、月を見ては詩を吟じ、花を見ては歌を詠し、貴妃に増たる (勝る) 女を愛し、何の不足も無 (無し)。去 (去れ) 共、今にも乱世に相成らば、数百の勢を率ひて (引具して)、不意に津輕平出の城 (平手の城) を夜討なし、若 (若し)、仕損せば (なば)、猶々 (いよいよ) 此山 (此の山) に引籠り、在城と (の) 定め、猶々 (ますます) 野武士・盜賊共 (記載なし) をかり (き) 集め、勢を催【以上 22 丁目裏】し、若 (若し)、我 (我が) 運、天に叶へて勝事を得ば (あらば)、勢ひ (勢に) 乗りて (乗って) 南部佐竹の未だ備へざるを討ん。敵 (謀事) 堅固にして破ずん (破れずんば)、退へ (い) て後、陳平良 (陳平張良) が (の) 謀事を定むべしと、常に (常々) 此事 (此の事) を思ひ (へ) 供、乱さん事 (仲々世を乱さん事) 其の便りを得 (得ず)、夫迄はいつも (何時も) 盜賊也。去れば、汝等も我に随ひ功をなす時 (時は)、如何成る出世の (も) 心の俛に叶ふべしと云て (言って)、終夜酒宴をなして、夜もふけぬれば連、弾正は女中に伴わ (記載なし) れ、寝所へ入れば (寝床にそこは入りけり。)、兄弟二人 (記載なし) も側から (記載なし) 成る一間へ (に) こそは (記載なし) 休みけり (る)。

#### 螳螂雷頭、易を以て弾正を諫る事【以上 23 丁目表】

其後 (其の後)、兄弟寝所に入りて (入って) 語て曰 (語って曰く)、敵き (記載なし) 弾正を討 (討つ) 事、今宵に有。彼れ (記載なし) が手の者百余人有り (る) と聞 (聞く) に、今 (今は) 老人も居合せず (居合わさず)。殊に弾正は天文地理に達すと聞 (聞く) に、我々が巧言、露いさ々かも察せずして、大事を打明し、大酒 (大酒に) 溺 (溺るる)、心に油断なし (して) 居る事は、偏に岩城山権現の導き玉ふ所也 (記載なし)。今宵の内を越すべからず連、密かに支度をこそはなしに梟。肌 (上) に取て (取って) は、さひみの帷子 (かたひら) に (記載なし) 錫金入し (記載なし) の半切を着し、上には老母より玉はりし白綸子の小袖を着し、白綾結て (結んで) 鉢巻なし、余る所を切て捨 (期って捨て)、師匠より玉わりたる (し) 丹波守吉道の刀式尺六寸、姉は彼の (記載なし) 平行【以上 23 丁目裏】安壺尺八寸の指添を横帯て (でとめ)、己れ (記載なし) 松岡鬼神にもせも (よ)、年来の敵、如何て安穩に置べきやと、兄弟は手に手を取て (取って)、弟、ぬかるな姉様と武者震ひしてそ伺ひ梟。斯る所に女壺人 I. 来りてあわた々敷 (参りてうやうやしく)、弾

正に告て(告げて)曰(曰く)、只今、雷頭入道が(記載なし)只壺人参り候と云へば、兄弟は是(それ)を聞(聞くよりも)、南無三宝、彼れ(記載なし)が随身の入道よな、譬へ弁慶にも(記載なし)せよ、猪熊にも(記載なし)せよ、余さず者と、目釘を志して(しめして)ぞ扣居鳧(控えける)。然に(然るに)彈正は寢所を出て(記載なし)、蠟燭を万燈(百灯)の如く輝か(記載なし)して、座(座に)、直れば、雷頭入道は畏りて(畏って)平伏なす(し、)。其時、彈正問(問へ)て曰(曰く)、汝壺人参事、真【以上 24 丁目表】意を得ず、子細ぞ有んと、以の外に(記載なし)怒らる々。其時、入道云(言へ)鳧様、某壺人参事、余の義に非ず。君の御身の上、危く思ひ(へ)て、夜を日に続(継い)で参上仕(仕り)候と云(言へば、)。彈正又曰(曰く)、我れ(記載なし)、汝等を出して此(此の)山に女共を相手となし(として)居(居る)事、今に限らず。然るに何を以て我(記載なし)身を危しと云(記載なし)や。雷頭が(記載なし)曰(曰く)、某、昨夜不吉の夢を見鳧間(見る故)、卦を立て占をなすに、山地剥(剥ぐ)と出たり。山地剥は(とは)、旧き(記載なし)を去て(去って)新敷を生じ(ず、)、群陰剥り尽す(剥居す)の課成れ(記載なし)ば、上り詰剥り尽して(詰剥り居りて)落危く、武士は劔難、女は針の災引きからげ、身構する非也。又、昨夜、天文を考ふるに、正敷【以上 24 丁目表】山の方、丑寅に当り(当りて)、君の命を司るけい星多くして光り(記載なし)を失ひしかば、猶々(いよいよ)不審に思ひ(へ)、又、卦を立て占ふに、山風蠱と出たり。三風蠱は三虫血を喰ひ、悪を以て義を害し、災害并ひ来(来る)理有り(なり)。去共(去り共)、此(この)卦に当る人は、我が(記載なし)身に三四人の敵有り。壺刻も油断成らずと云へり。殊に天文と面共割符を合せ(合わせ)たるが(記載なし)如く成れば、只事に非ず。分散したる者共を引まとわ(め)ず、某壺人夜を日に続(継いで)参上仕候(参り候)と、前後分明に答鳧(答へければ、)。彈正が曰(曰く)、汝が(の)忠節神妙也。我れ(記載なし)も日頃より何となく肉動する事成れば、ふ意に分らざれば、是に【以上 25 丁目表】依て、我が隨身を失ふか、味方を損ずるか、紛々としてふ案に候所、今日不思儀に二人の珍客を設け、幸ひ主従の約束致しぬれば、肉の動きし

(記載なし)も悦び(記載なし)の前表(前兆)成らんと思ふ折柄、汝恙<sup>づづが</sup>なく(一人か<sup>け</sup>)来る事、此上の(なき)事有んや(ならんや)。先夫事也々々休息致されよと云へば、雷頭は(記載なし)膝(膝を)立(立て)直し、休息所に非ず。君の一大事也(記載なし)。占の表と式人の客、符合の上は、一寸も(にても)御油断有(有る)べからず。殊に人倫の通わざる(通らぬ)此(此の)山へ、縦へ道に迷へぬれば迎、来る事、其意を得ず。君の為踏込で(踏込んで)三ちんになさんと云にで(言へ立上るを)、彈正は(記載なし)押留め、早まるな(早まるなよ)雷頭。子細を知らねば尤の事也。我れ(記載なし)は知(知っての)【以上 25 丁目表】通り油断の成らぬ身也。去迎も(去るとても)事に寄者なり。彼れ(記載なし)等は(記載なし)夫婦連(連れ)にて廻国順礼(修行)、路に迷ひ、飢(飢に)勞れて鬼の住家へ(に)来る。窮鳥懷に入(入る)時は、狩人も是を殺さずと云へり。そこを以て殺すに忍ば(び)ず、委細を尋るに、国は武州江戸と云へり。若き紛れに(連にて)、色欲の為に(記載なし)人を悩め(あやめ)、據なく女を奪て(奪って)

立退<sup>のき</sup>しが、路金を遣ひ果して後よりの追手を恐れ、姿を順礼と成り(順礼と姿を改め)、里へ下りては手の内を乞(諸人に手の内を乞へ)、野山に伏し(伏して)、山を家とし(として)、漸々と是迄落(落ち)延来る由。骨柄といふ(へ)一つの器量(器量を)備わりし故、幸ひに今我れ(記載なし)に随ふ事仕合【以上 26 丁目表】也。然(然る)に、汝が(の)如く虚実を正さず、猥りに人を死去せしめば、何を以てか(記載なし)日頃の本意を達せんや。J。(譬へ彼等偽って逆意有るとも、我何んぞ恐れんや。)汝猥りに無用の事を云て(言って)、彼等を疑ふ事無れ迎、本(元の)寢所へ入(入りに)鳧。蟬螂雷頭



も（記載なし）力無く四方を白眼で退き鳧。流石、天地を極る（極める）程の雄将成れ共、運の極まる（尽きる）時こそ、是非なるれ（天命なれ）。

重治郎兄弟、弾正主従働の事、附、主従討死の事

去（去る）程に、兄弟は宵の内より支度をな（記載なし）して、切て（切って）出んとせし所（記載なし）に、隨身の（記載なし）蟬螂雷頭来りて、出る事を得ず。一間にて（記載なし）二人の（が）問答を【以上 26 丁目裏】聞（聞いて）、手に汗を（記載なし）握りて扣へ居る（ける）に、終に（記載なし）雷頭が諫を用ひず、寝所（寝所へ）こそは入（入り）しかば、兄弟は（記載なし）大に悦び、重治郎、姉に語りて曰（曰く）、縦（記載なし）、雷頭来る共、今宵の内を越すべからず。（又）明日にも成らば、又（記載なし）、入道が如何様（記載なし）成事をか諫（諫め）、我々を謀らん（打たん）。折と（を）見合せん迎（見合せ待つときは）、追々手下の者共帰り来り、其後（其の後）、異変も斗り難し。先（先づは）、夜ふけたるを（記載なし）待受（待つ打って）、出向ふべし（出でん）迎、夜の更るを（更ける）待（待ち）居たり。斯て、其夜（其の夜）も丑三つにも成りぬ（け）れば、皆々寝静（しづま）り（寝すずまる）たるを（記載なし）見て、自分は吉と（良して）、兄弟は（記載なし）手に手を取て（取って）顔を（記載なし）見合せ（記載なし）、心細くも一間を出（出で）、結り結り【以上 27 丁目表】の戸障子を押明け押明け、奥の間にこそ指懸り（忍入り）、K.（ここにも弾正居らざれば、又奥の間にぞ差かかる）明て（記載なし）見るに、内より落し錠にて中々明けられず。兄弟立寄（立寄り）、南無浅草観世音、岩城山大権現と、L.（一心に祈念するれば、則、兩人忝度に押懸り見れば、溝口はづれ倒れ鳧。弾正、）此音にて（記載なし）目を覚し、何者成るや（ぞ）。狼籍すると、枕本に置（置き）たる刀のさやをはづし、M.（切て懸る。身構へすれば、二人は懸がず、傍に寄り、如何、松岡七ヶ年）以前、我々が父母を手に懸、立除き（退）しが、其

（其の）時、我々（我等）幼少にて己れ（記載なし）を討事能わず。夫より劔術（劔術の）修行して、諸国を尋ね廻りしに、己れ（記載なし）に逢ず（逢ふこと難く、）。今此以上 27 丁目裏】所（今ここ）にて逢（逢ふ）事は、うとん花の咲（咲く）を待（待つ）たるが如く也。尋常に勝負せよと詰寄るに、弾正少（少しも）騒がず、からからと（記載なし）打（打つ）笑へ、おお（記載なし）、汝等は我が手に懸し匹夫治右衛門が倅よな、其時己れ等（己等も）、同じ冥土と思へ（ひ）しが、手早くも我が手の内より漏れ（記載なし）出て、我れ（記載なし）を敵き（記載なし）と思ひ、是迄尋ね（記載なし）来る事、甚（甚だ）以て不便也。迎もの事に我が手に懸て（汝等も我が手にかかつて）、未来の父母（父母に）対面せん。観念せよと、抜打（打ち）に、はつしと打ば、かへ（立）潜り、後へ廻りて（記載なし）切付けるを、心得たりと請合せ（合）、互に透をぞ窺ひ鳧。お筆も小太刀を抜放し（合せ）、透を伺へ切付んと身を開き切先を除（よけ）、しのぎをけづ【以

上 28 丁目表】り、鐔を割（わり）（割り）、切先より火花を出し（つらして）、互に秘術を尽し鳧。弾正、手練也（記載なし）と云へ共、兄弟に切立（立て）られ、太刀先乱れて見へに鳧。然（然る）に互の鐔音、ゑひゑひ（ええええの）声（声に）、蟬螂雷頭が耳に入（入り）しかば、こは曲者よと常々放さぬ忝尺二寸余りの大斧を引（引つ）かつき、奥の間指て（差して）欠出しが（馳け出る。）、襖戸障子明る（明ける）も面倒と打破り、難なく奥へ行見れば、弾正、兩人（二人）を左右に受（記載なし）、爰を最後と（せんど）戦ひしが、雷頭（雷頭の）、此（記載なし）軀を見るよりも（記載なし）、ゑ々、血くさひ（乳臭い）小倅共、此（此の）世の暇着さ（をとら）せんと、N.（蟬螂が大斧を振懸れ



ば、お筆は心得たりと受流し、開て（開いて）討てば（討込ば）、飛違は（へ）秘術を  
【以上 28 丁目裏】尽して戦ひ鳧。敵は主従、此方は兄弟、四人（四人の）戦ひ実に勇主（記  
載なし）敷見へに鳧。座敷の（今は座敷の）戸障子も（記載なし）打破り、前の庭にぞ出

（出で）に鳧。内には弾正、重治郎、外にはお筆と雷頭（お筆、雷頭と）、爰をせんとと  
戦ひ（戦い）鳧。雷頭恐りて（怒って）、面倒也、只老掴み（記載なし）と勢神勵まし（記  
載なし）働けと、此方は手弱き（記載なし）柳の姿、右を払へば左に廻り、左を払へば前  
に廻り、前を払へば後へに（に）廻り、寄らんとすれば便りなく、只かけろう稲妻の如く  
成れば、詮方尽て（尽きて）惘れ鳧。お筆は兼て手裏剣を髪に指置きしが、透を伺へ（ひ）  
手練の早業、何かは（何れは）以て違ふべき、雷頭が左の眼にぐさと立（ぐさっと立、）  
【以上 29 丁目表】〇。けれ共、ひるむ気色は更になし。ゑひ、物々しや。昔、鎌倉の権五

郎は鳥海の弥三郎に四人張の大弓にて眼に射拔れしか共、終に（討負しが、流石）其失を  
返したり。己れ（記載なし）も、今に思ひ知ら（とら）せんと、虎の勢ひ（記載なし）、  
獅子の怒（怒り）をなし鳧ば、実に市原の鬼童丸色ぐろ（記載なし）が動ぎし（軀の働さ  
し）如く也。去れ共、大斧の切先、次第次第に乱れしかば、運の尽めにや庭のさく石につ  
まつき（い）て、後へどふ（う）とぞ（記載なし）倒れ鳧。お筆は（記載なし）心得たり  
と、透さず首を水も溜らず打落し鳧。先（先ず）、弟床しと座敷を見れば、重治郎は眉間  
に少々薄手を受けながら、朱に成て（なつて）戦ひ鳧。弾正【以上 29 丁目裏】は少しも手  
を負ず（負はじ）、猶々（いよいよ）勇み（ん）て働き鳧。お筆は声を勵まして（かけ）、  
如何に弾正、己れ（記載なし）が隨身雷頭は、我が（記載なし）手に懸て打たるに（打つ  
たるぞ）、己れ、いつ（何時）迄働くそ。観念せよ、と切（切り）懸れば、観念とは舌長  
しと、式人（二人を）左右に引受（受け）て、請つ（受け）流しつ、丁々と暫し（く）  
が間戦ひしが、重治郎が太刀を（重治郎怒って打込太刀、弾正）受損じ、眉自（眉間）を割  
られ倒る々所を、お筆、透を見済して（すかさず打込んで）、肩先より乳の下懸て切下げ  
たり。重治郎、弾正（弾正が）上にあがり、如何に松岡、父母の敵き（大敵）、覚悟せよ  
と云より早く（言ふが早いか）首切つて（首ちらに打落す。）、雷頭と二人の首を（記載  
なし）泉水にて洗ひ、懷（懷中）より父母の法名を取出して、手向鳧に（記載なし）そ心

地善。時に萬治二年九月廿一日也。夫より【以上 30 丁目表】家中を穿鑿（探さく）し鳧  
に、廿歳前後の女式人有（居り）。重治郎（重治郎言ふ様）、己れ共、松岡（松岡が）妻  
にて有が（あらん）、我が手に懸也と（切捨んと）云（言へ）ければ、畏り（二人は畏り）、  
拙者（私）共兩人は秋田にて候が、岩城山に参詣せし所、弾正が隨身に連られて是迄参り  
候也。何卒父母の方へ（下に）御返し（返し）下され候はば（下さらば）、生々世々（世  
々代々）の御恩忘（忘れ）候まじ（ず）。重治郎聞て（聞いて）、夫成らば、其（其の）  
方共（記載なし）の親の名はと尋ねけ（記載なし）れば、拙者（私の）親は左七郎と申（申  
し）、か今（もう）老人は喜惣太と申、何卒家元へ（に）返し玉わ（記載なし）らば、其  
（其の）御恩を（は）忘れ申まじ（申さず）と、泪ながらに演（のべ）ければ、聞済し、  
夫より女共（女中共）を先に立、金銀衣類を（記載なし）取（取り）出し、後に（岩穴に）  
火を懸（かけ）、焼捨て（てて）、夫より平出の城下に打越へ（記載なし）、右の【以上  
30 丁目表】次第（趣）を（記載なし）取次（取次ぎ）を以て言上なす（し）。然（然る）  
に領主（城主に）、式人を（記載なし）召れ（召され）、委細を御尋（尋ね）遊ばされ、  
汝等若年（手）の身として左程の大敵を尋（尋ね）出し、討取（取る）事、古今に（記載  
なし）珍ら敷者共（記載なし）也。右之盜賊、我が領分（内）に有て（有って）、当国近国  
をおひやかし（侵し）たるに、我が（記載なし）知らさる事は（記載なし）、反つて汝

等に恥たりと、甚々（甚）以て御感有り。先（先づ）、仙台表へ達すべし（引渡しあそばされける）。P.（重治郎事は少々手荒を負ぬれば、医療を尽され。）仙台的御治世、藤原の（記載なし）綱宗公也。去年七月忠宗公御逝去遊ばされて（記載なし）、政治未だ乱れさる時分（時）成れば、始終を（記載なし）開召て（されて）、御感の余り津軽への御札に使者を送られ、其（其の）後、新地式百石を以て、重【以上 31 丁目表】治郎を御（記載なし）召出し有て（有って）、士格に入（入り）、武士に御取立遊ばされ候て、姉は能（良き）縁を求めて嫁がすべし（嫁すべし）と也。其（其の）後、綱宗公より面使（使者）を以て、黄金拾両、巻絹式十疋、江戸中の窪（記載なし）笠島主膳方へ送られ。斯て（かくして）兄弟も願の上、江戸中の窪、師匠の方へまかり出るに、御家内の御悦一方ならず、尚又、老母も今に（未だ）存命成れば、二人（二人を）呼て（呼んで）申様、我れ（記載なし）汝等に別し（別れて）より、此の悦び（記載なし）を聞んと思ひ（聞くを楽しみに）、露のいのち（露命）を生（行き）ながらひ（へ）し也。只ふ便成るは多力坊也。去（去り）ながら、年に不足が（記載なし）無れ共（なければとて）、敵を（記載なし）討迄存命せば、如何程（何程）か悦び申すべきに、今は悔て（記載なし）詮もなし、迎、門人を集め、

三日三夜（晩）<sup>の</sup>之御祝儀也。【以上 31 丁目裏】去（去る）程に、笠島主膳は元より、お筆が器量（形容）とい々（言へ）諸芸と云（いへ）、何一つ（記載なし）不足無れば、本望を達したる後には（達したその時は）、不足（記載なし）子息貞治郎に嫁せ（記載なし）しめんと思へ共、Q.（本望とげるを待居りて、縁組もなさざれば、幸ひ嫁にせんと思へ共、）今は上懸り（上惣）の者（身）成れば、自分にも相（記載なし）成らず（ならずと）。

此（此の）<sup>ワモムキ</sup>趣（趣き）を仙台表（綱宗公）へ達し、覺に（ば）、綱宗公も（記載なし）（それ誠に）幸ひ（記載なし）也と仰られ、お筆は貞治郎（貞治郎の）妻と成（成り）、中睦ま（記載なし）敷暮し。扨、重治郎は本国へ（に）立帰り覺と也。夫より式百石の御知行を頂戴なして（記載なし）、其（其の）身は杉野重治郎と名乗り、目出度（度く）春をむかへ（ひ）覺。是全く孝行（記載なし）の天道にかなふ故なりける。【以上 32 丁目表】む

#### 4. 「筆者所蔵本」と「木戸有義本写本」の影響関係

第 3 章の翻刻文に示した下線 A から下線 Q の内容を分析し、「筆者所蔵本」と「木戸有義本写本」の影響関係を考えたい。そこで今一度、下線 A から下線 Q の文章を一覧しておきたい。

- A. にても流れ来り候やと（記載なし）、
- B. 教へ玉ひと、泪と共に申覺。修行者聞て御歎き尤也。去ながら老少ふ定の（金銭はおろか少しも厭ふまじ。併無定の）
- C. 音に違わず。（横笛の音遠く聞ゆれば、猶々耳をすまして聞所に）
- D. 存ぜず候得共、斯御近所の御人方とは思へも寄らずして居り候也（存ぜず候へ共、斯近所の御人方とは思ひも寄らずして居候也。）
- E. （猶行末を伏拝み、）
- F. 詮方尽て居る所に、身の丈は七尺余りの男、其容躰善顔にして、眉緑に其色（記載なし）
- G. 里へ下り着定めて雪中にこたへ死に成らん迎も、行も返るも同じ道に候得ば（記載なし）、
- H. 道を失ひしを（記載なし）

- I. 来りてあわた々敷（参りてうやうやしく）、  
 J. （譬へ彼等偽って逆意有るとも、我何んぞ恐れんや。）  
 K. （ここにも弾正居らざれば、又奥の間にぞ差かかる）  
 L. （一心に祈念するれば、則、兩人壹度に押懸り見れば、溝口はづれ倒れ覺。弾正、）  
 M. （切て懸る。身構へすれば、二人は騒がず、傍に寄り、如何、松岡七ヶ年）  
 N. （蟻螂が大斧を振懸れば、お筆は心得たりと受）  
 O. けれ共、ひるむ気色は更になし。ゑひ、物々しや。昔、鎌倉の権五郎は鳥海の弥三郎  
に四人張の大弓にて眼に射抜れしか共、終に（討負しが、流石）  
 P. （重治郎事は少々手疵を負ぬれば逆、医療を尽され覺。）  
 Q. （本望とげるを待居りて、縁組もなさざれば、幸ひ嫁にせんと思へ共、）

さて、「筆者所蔵本」と「木戸有義本写本」の影響関係を考える際には、もちろん両冊の他にも、原本やそれと同系統の写本などのテキストが存在し、影響し合っていた可能性も考慮しなければならない。ただしここでは敢えて両冊に限ってのこととして分析をしていきたい。

まず最初に着目すべきは、下線Dである。「筆者所蔵本」には当初記載されていなかったが、あとから「木戸有義本写本」に見られる文章が、「筆者所蔵本」の該当箇所の行間にそっくりそのまま挿入されている。また、下線Oは「木戸有義本写本」に見られない逸話が「筆者所蔵本」に付加されている。したがって、「木戸有義本写本」のあとに「筆者所蔵本」が成立したと考えられる。

次に下線A・F・G・Hは「筆者所蔵本」に見られる文章であるが、「木戸有義本写本」には見られない。「木戸有義本写本」以降に成立した「筆者所蔵本」のなかで、部分によっては物語のディテールが付加されたということである。逆に下線E・J・K・L・M・N・P・Qは「木戸有義本写本」に見られる文章であるが、「筆者所蔵本」には見られない。「筆者所蔵本」にこれらの文章が入っていれば、物語のなかの様子をよりリアルに思い浮かべることができるが、一方で、入っていないからといって物語の進行に支障を来しているということはない。すなわち、ディテールの付加とは逆に簡略化が図られている。下線B・C・Iでは、筆者所蔵本と「木戸有義本写本」の文章内容が著しく異なっている。

以上の点から浮かび上がることは、やはり「歌津敵討ち」が庶民の間での語りのためのテキストだったということである。テキスト制作者の教養や文章能力、物語に対する興味の持ち所、語るという行為との連動性などで、粗筋は変わらなくても細部にはバリエーションが生じている。

## 5. 立山信仰史研究における「歌津敵討ち」

筆者は以前、拙稿「川と海から見た立山信仰」<sup>5</sup>において、海上交通に視点を置いた立山信仰史研究の必要性を指摘し、特に日本海交通に視点を置いて、若干の考察を試みた。具体的な内容については、同稿を参照していただくことにして、その中で謡曲『善知鳥』について触れている。

室町時代に成立した謡曲『善知鳥』は、越中国の立山と陸奥国の外ヶ浜が舞台の物語である。物語の前段の「立山地獄説話」と後段の「津軽の珍鳥伝説」を「片袖幽霊譚」で繋ぐかたちで構成されている。筆者は、外ヶ浜のすぐ近くに十三湊があり、日本海交通による人と情報の行き来が、謡曲『善知鳥』を生み出すに至ったと考察した。

さて、転じて「歌津敵討ち」を見ていくと、「木戸有義本写本」の第10章「三人廻国東西別れの事 附越中立山因縁物語りの事」は、越中国の立山地獄を舞台に、大船の船頭

の遭難譚と、岸に漂着した船頭の遺品を奪って富豪になった夫婦に対する船頭の復讐譚を、繋ぐかたちで構成されており、やはり『善知鳥』と同様、海上交通と立山地獄説話が結びついて成立していると考えられる。その背景には、寛文年間（1661～1672）、河村瑞賢によって秋田から津軽海峡を経て太平洋側に出て江戸に至る東廻り海運と、日本海沿岸を廻って下関を経て瀬戸内海から大坂に至る西廻り海運とが整備されたことがあろう。なお西廻り海運には北前船が活躍していた。

一方、陸上交通の面でも、東北地方と越中国立山との繋がりには道中記に見られ、経路に立山と仙台を含む以下の3冊が残っている。

- 寛政11年（1799）『湯殿山 東坂（ママ） 秩父 驛路日記』<sup>6</sup>。
- 天保15年（1844）『御嶽山 立山大権現 湯殿山 拝所順略道中記』<sup>7</sup>。
- 弘化3年（1846）『信濃 越後 出羽 陸奥 常陸 下総 上総 安房 道中日記帳』（3冊1揃）<sup>8</sup>。

ところで、立山の室堂平には、室堂小屋の近くに陸奥国と関わりのある梵字を刻んだ石標が立てられている。正面には梵字で「ナ・ム・ア・ミ・ダ・ボ（ブツ）」が薬研彫で刻まれ、その向かって右に小さく「奥州仙臺観音寺 快山法印筆」と刻まれている。この「快山」は、宮城県図書館所蔵の『宮城県寺院明細帳』に見える「牡鹿郡鮎川村大字鮎川濱字南」「観音寺」の開基「僧大量快山」と推測されている<sup>9</sup>。また、この観音寺は、『立山寄附券記』宝暦12年（1762）頃に「立山御戸帳縫梵字寄進 奥州仙台 観音院」<sup>10</sup>と記載された「観音院」と関係があると推測されている<sup>11</sup>。

以上のとおり、「歌津敵討ち」は立山と陸奥国との何らかの関係を想起させる意義があり、立山信仰史研究の分野において今後の新たな研究課題となりうる。

## おわりに

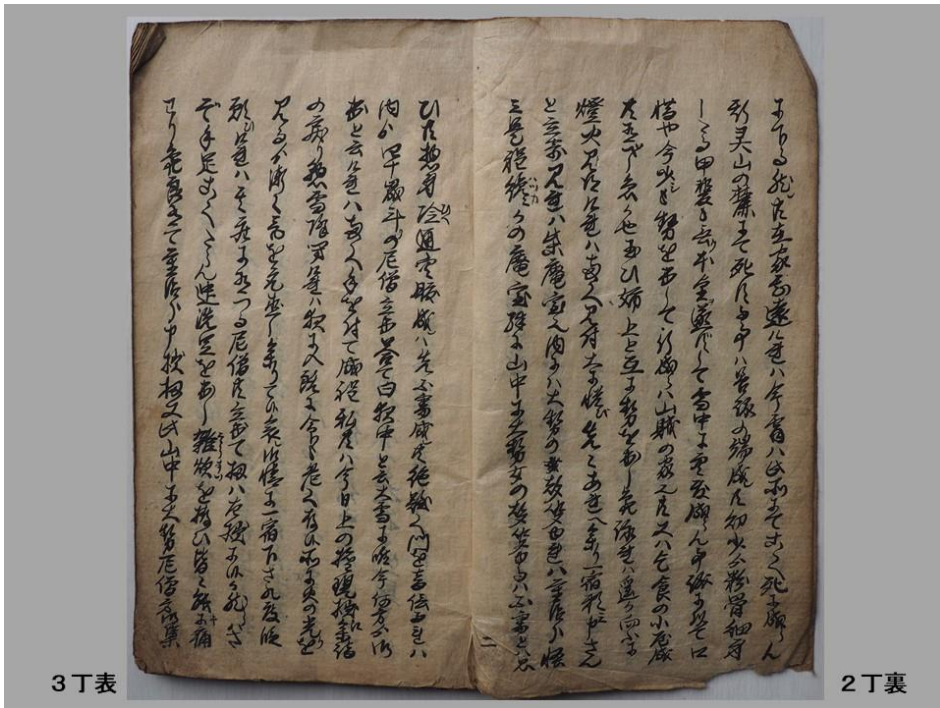
以上本稿では、史料紹介として筆者所蔵の本読みテキスト「歌津敵討ち」（「筆者所蔵本」）を全文翻刻した。それによって今回、「筆者所蔵本」は、その他の現存12冊の「歌津敵討ち」諸本の中で、物語内容が最も広く、且つ多く掲載されている「木戸有義本写本・歌津敵討夢想之枕」と同系統の作品であることが明らかになった。具体的には「筆者所蔵本」は「木戸有義本写本・歌津敵討夢想之枕」の10章から14章に概ね該当している。両作品の成立時期は比較的近いと考えられるが、「筆者所蔵本」への「木戸有義本写本・歌津敵討夢想之枕」の文章の部分的な挿入状況などから判断して、厳密には「木戸有義本写本・歌津敵討夢想之枕」が「筆者所蔵本」よりも多少早く成立したと考えられる。

「筆者所蔵本」とは別にヤフオク！に出品され、落札されたもうひとつの作品「歌津敵討夢想之枕」は、同一古物商から2020年の比較的近い時期に出品されており、また、「筆者所蔵本」との形態・分量の比較や内容の比較・分析から、「筆者所蔵本」と2冊一揃えか、あるいはさらに別の1冊を含む3冊一揃えの作品であったと推測される。

立山信仰史研究の分野における「歌津敵討ち」の史料的位置づけについては、越中国立山と東北地方の繋がりといった点で、海上交通の面と陸上交通の両面から、若干の展望を述べたが、本格的な考察は今後の課題としたい。



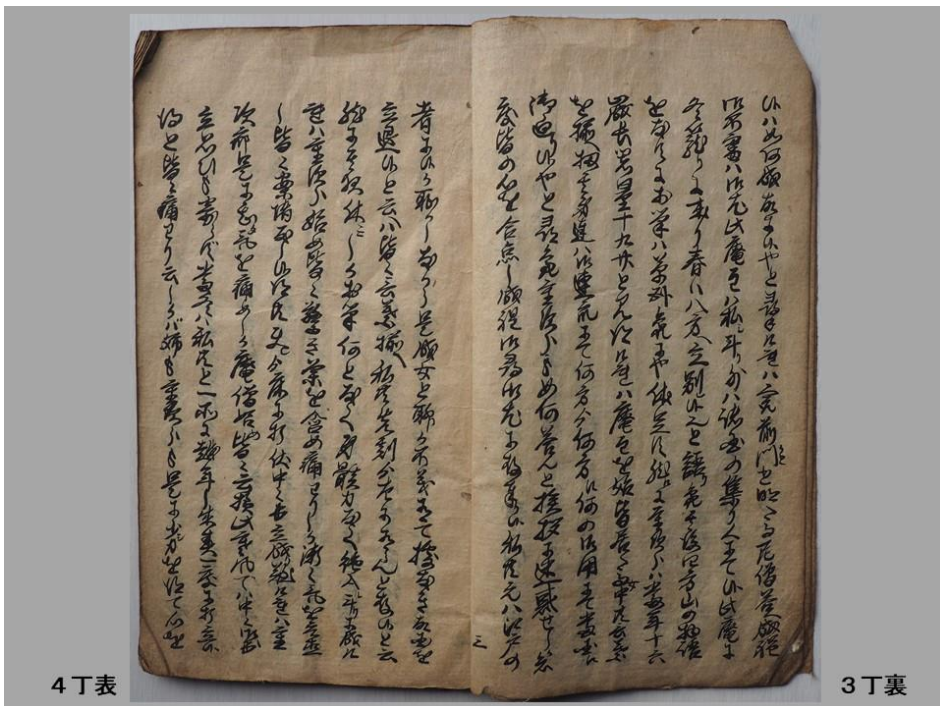




3丁表

2丁裏

(写真3)

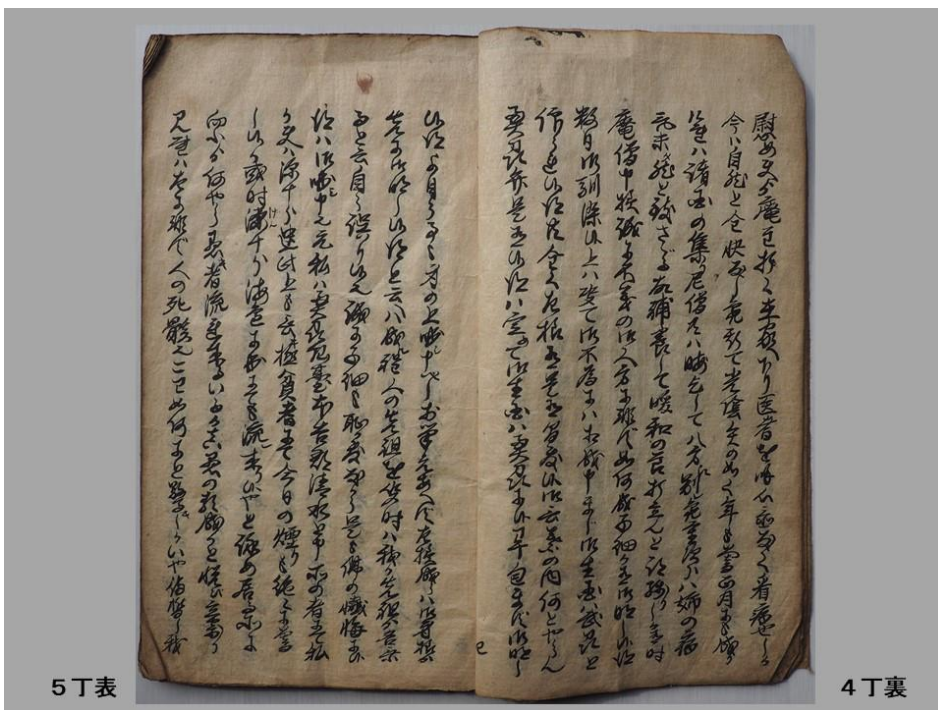


4丁表

3丁裏

(写真4)

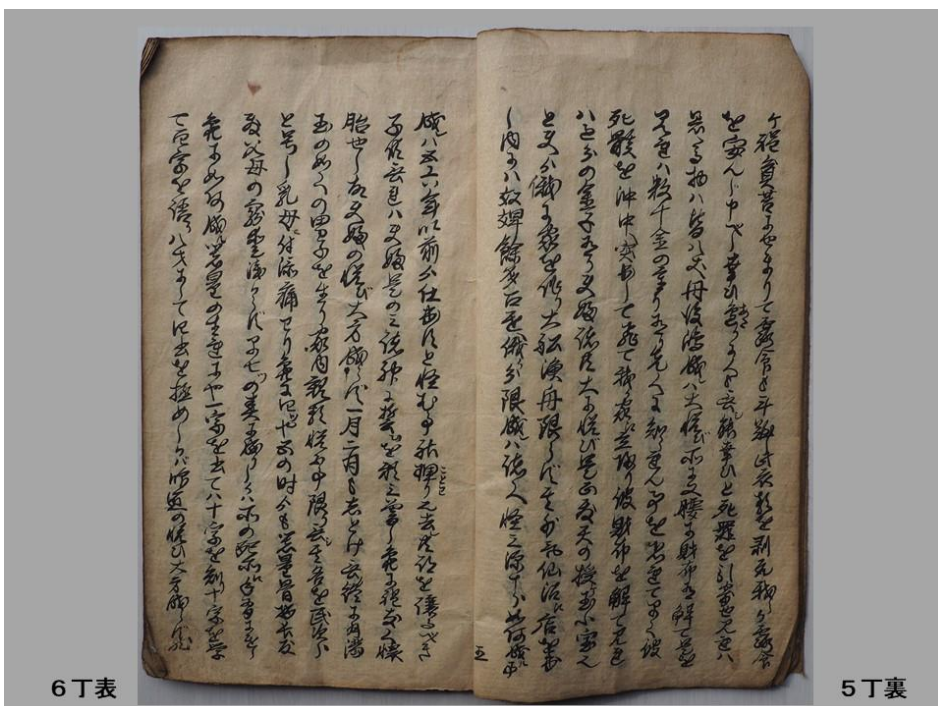




5丁表

4丁裏

(写真 5)



6丁表

5丁裏

(写真 6)

6 丁襖

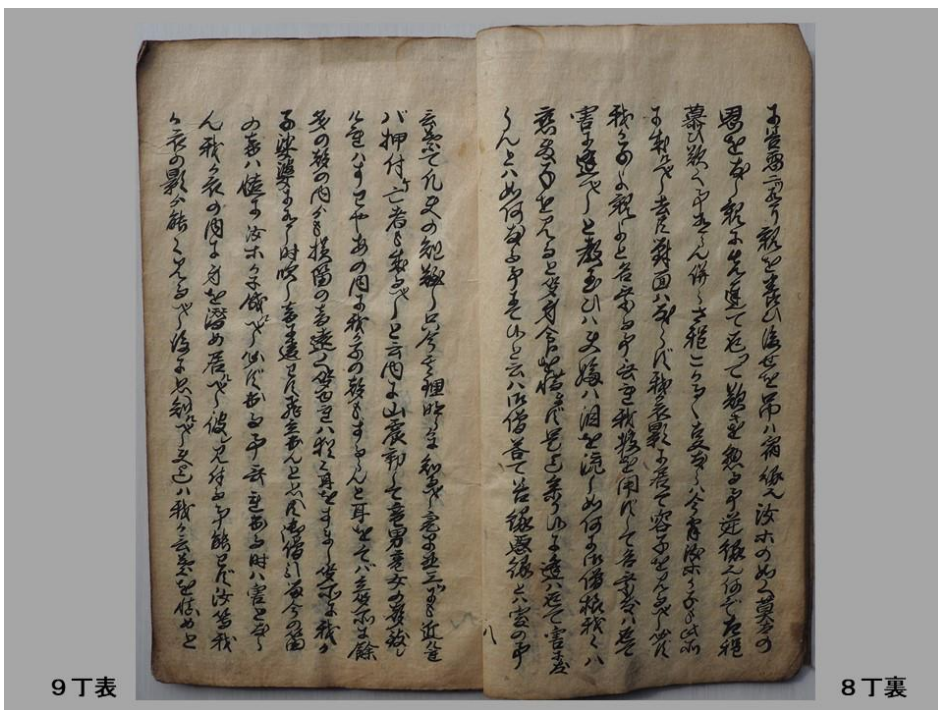
7丁表

7 丁襖

8丁表

27 (141)

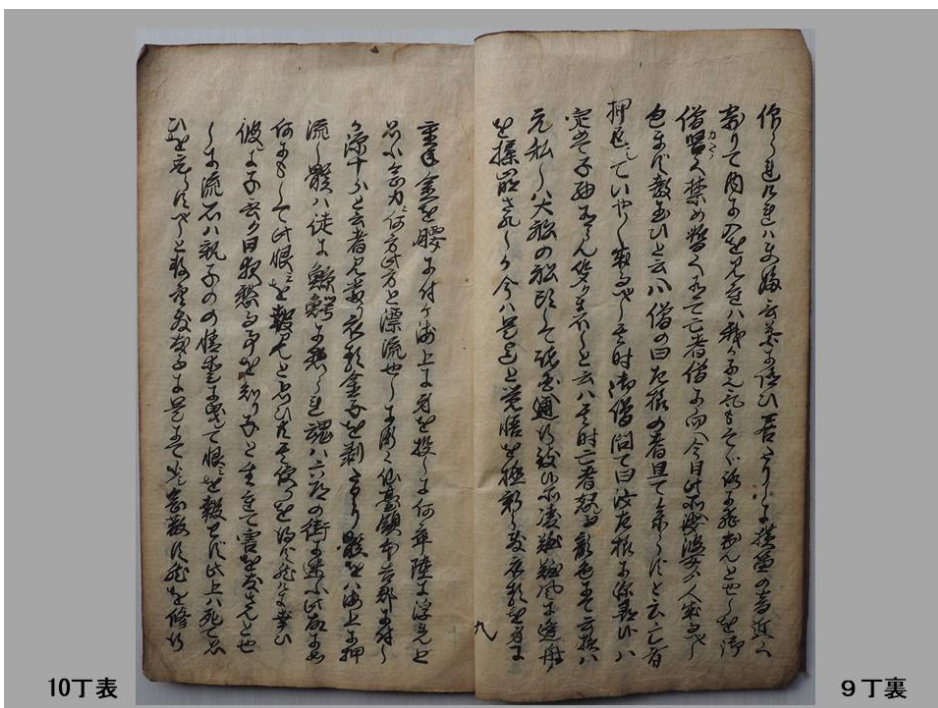




9丁表

8丁裏

(写真 9)



10丁表

9丁裏

(写真 10)

10丁裏

11丁表

十

11丁裏

12丁表

十一



於羽昆兄子伯公之子孫伯公之孫

初てを言ふに、是を危殆の如きにして、危殆の言ひは、脚端後  
 有難き事なりと爲す所の如きなり。知さば、又今金律（律）を言ふ  
 以上、格洋の忠告に、銅胆（胆）の言ひを成し、又や若くは若くは  
 既成とす。あるんが、此處に、さうと云ふ、若くは若くは  
 も知さば、是を言ふ、如くは相違ひ、此處に、若くは若くは  
 而して、此處に、此處に、此處に、此處に、此處に、此處に、

医者目之而入也。予多病重。臣乃同て曰。深瘡哉。吾人何方  
 の人か。引止む。旅憂つ。さ。智を以て此處より去。捕りて  
 て。悩。之。勿。小。云。之。人。細。思。は。ず。ん。と。君。ひ。は。是。三。事。を。以。て。有。根  
 方。ハ。南。真。有。ま。は。は。ひ。は。石。根。高。の。内。君。は。され。後。内。事。特。子  
 有。ま。は。の。元。人。ハ。武。君。は。中。と。さ。さ。さ。さ。は。後。新。也。を。ま。つ。つ  
 秘。知。略。て。中。振。集。ハ。完。旅。以。て。者。衆。は。ひ。つ。今。君。振。集。ハ。中。國  
 ハ。東。江。以。高。市。昔。那。君。得。村。の。者。を。の。所。有。は。之。を。是。之。也  
 臣。使。の。所。有。幸。あ。て。今。臣。而。有。て。之。而。以。之。又。迷。の。旅。憂。

12丁裏

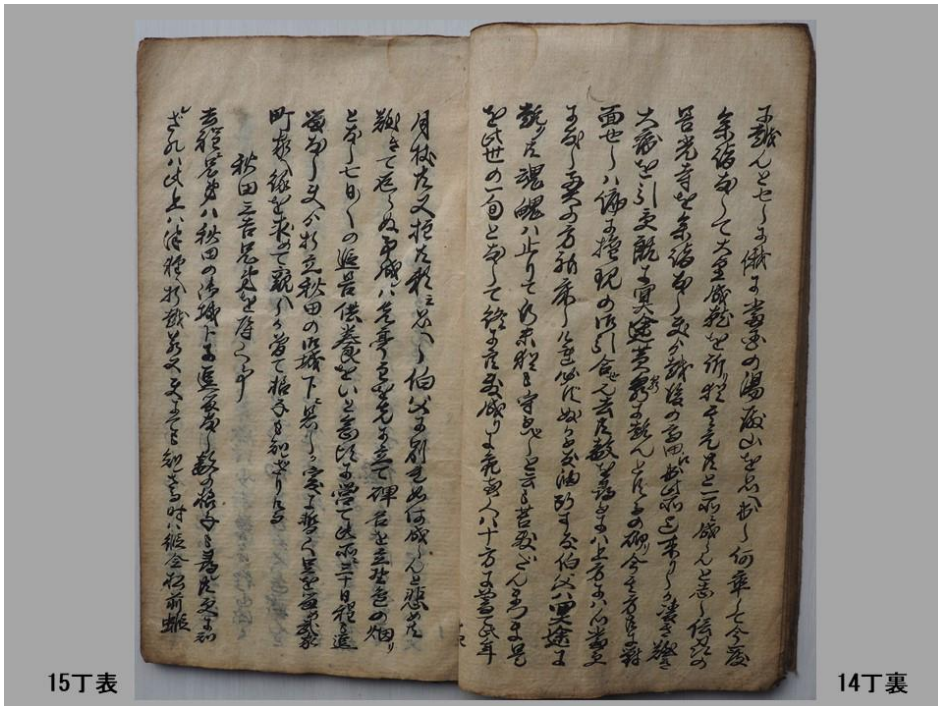
十一

[illegible]

清小意、の御守先指す、如何ふと、誰、さひ、い、ふ、か、を、尋、ね、思、  
 け、候、は、若、き、振、り、の、御、初、代、を、上、と、執、持、を、婦、り、希、求、す、之、を、邊、取、  
 候、の、家、を、湯、伯、父、伯、の、所、を、定、め、選、ば、り、し、者、希、も、存、代、を、と、不、  
 意、す、あ、え、と、潤、み、り、の、身、を、付、け、は、い、は、若、く、は、代、を、許、け、の、無、  
 き、事、新、婦、に、是、れ、能、龍、を、嫁、け、し、り、及、び、ぬ、き、に、死、な、さ、れ、お、禁、ん、  
 じ、の、そ、の、方、に、の、先、途、を、ん、重、め、し、御、口、傳、け、は、さ、あ、り、候、者、也、  
 有、の、事、り、是、れ、中、に、是、れ、由、血、筋、之、縁、を、と、身、を、堅、固、に、す、り、一、端、誤、  
 る、と、思、用、と、す、や、斯、く、な、る、方、に、物、希、と、し、め、中、に、能、く、思、行、て、要、以、

13丁裏

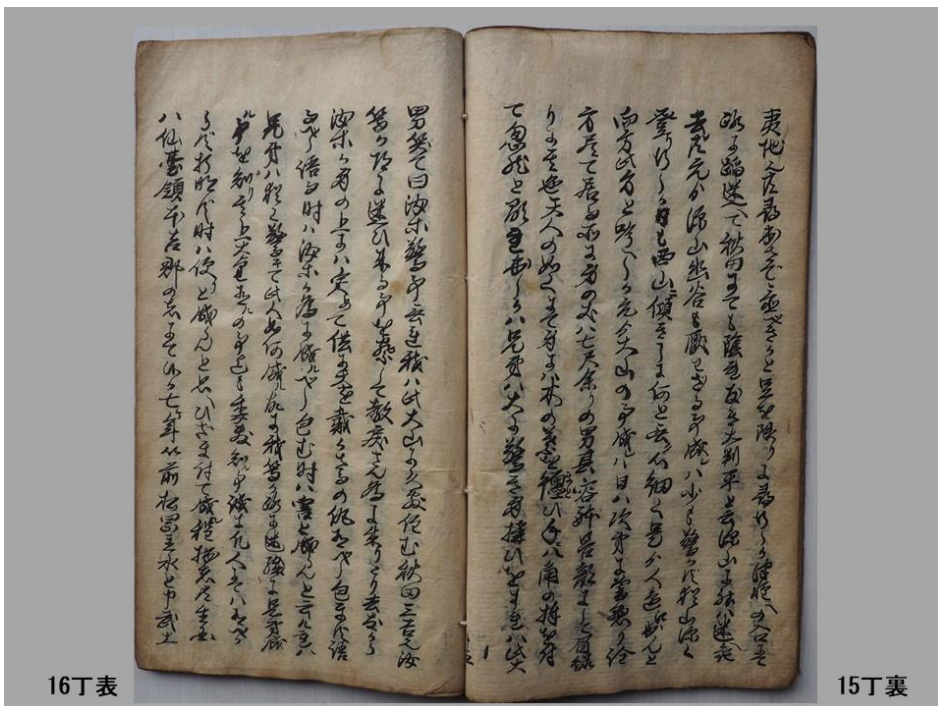
十



15丁表

14丁裏

(写真 15)

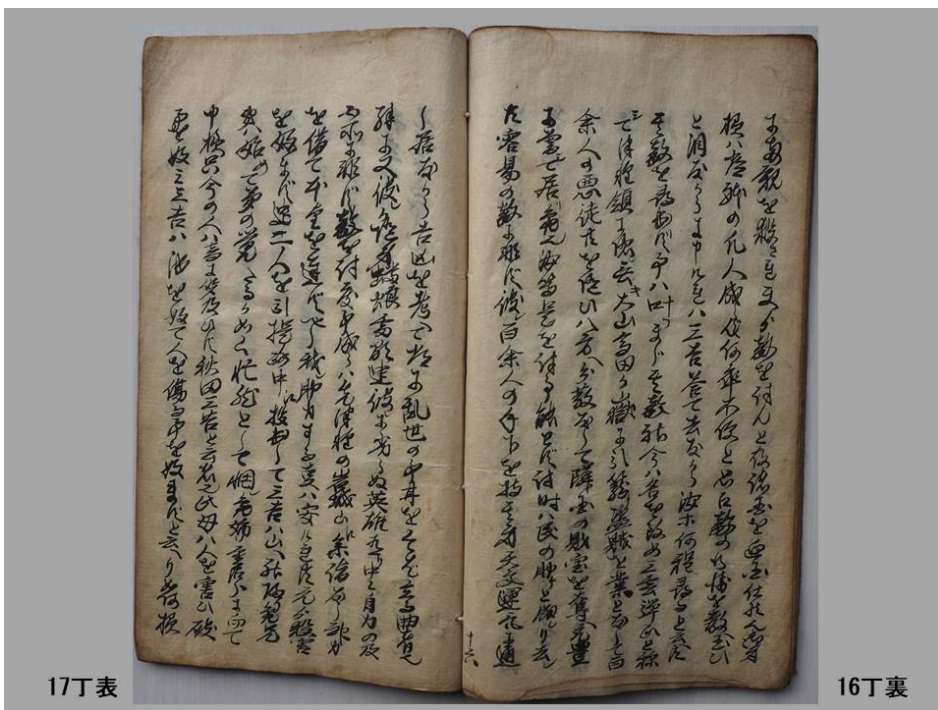


16丁表

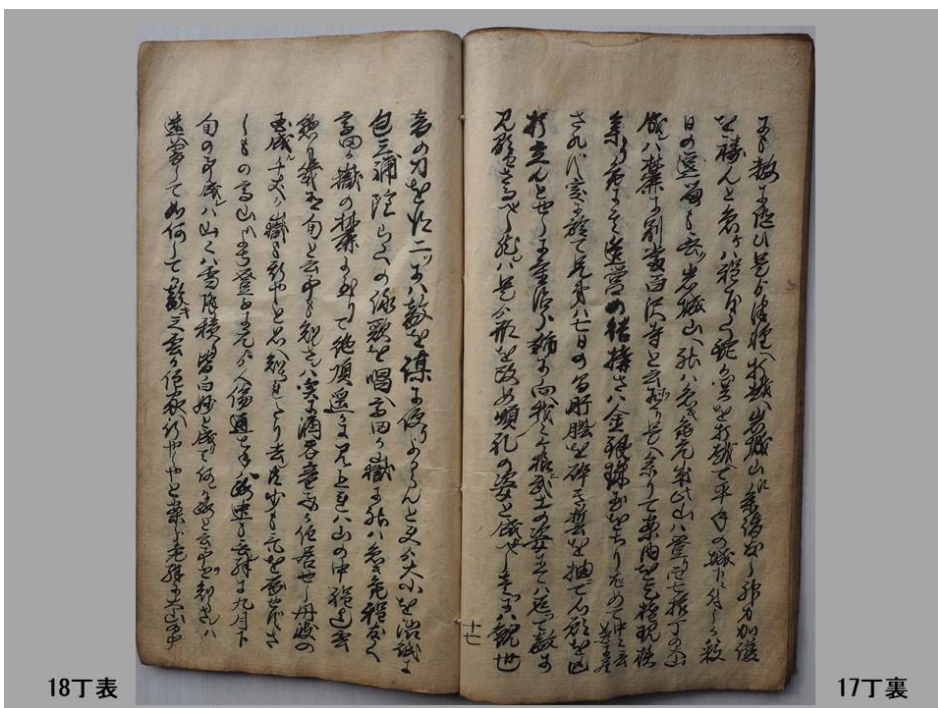
15丁裏

(写真 16)

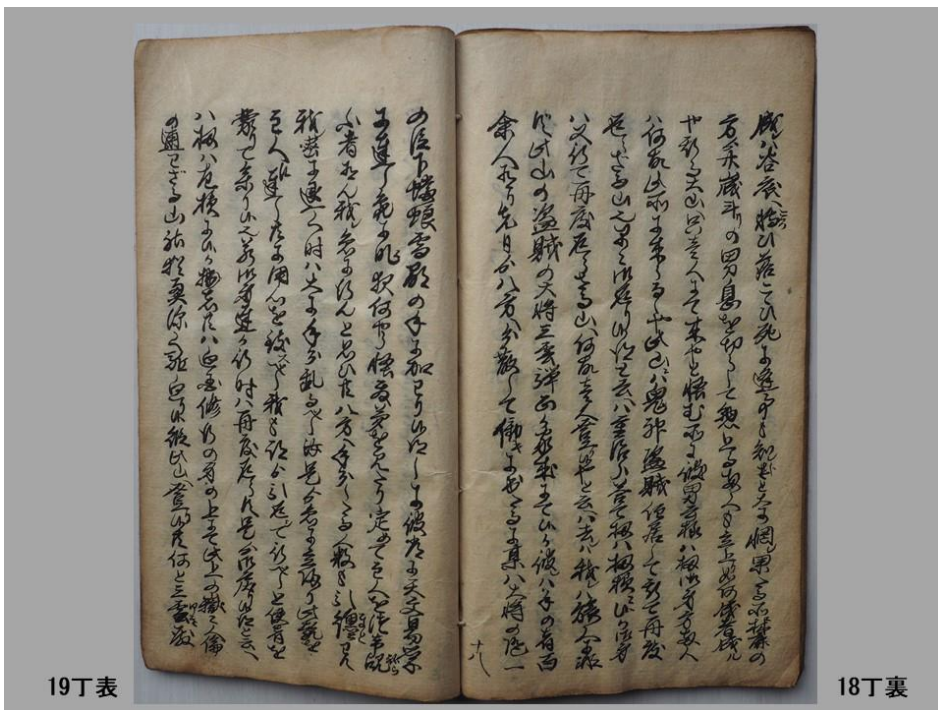




(写真 17)



(写真 18)



19丁表

18丁裏

(写真 19)

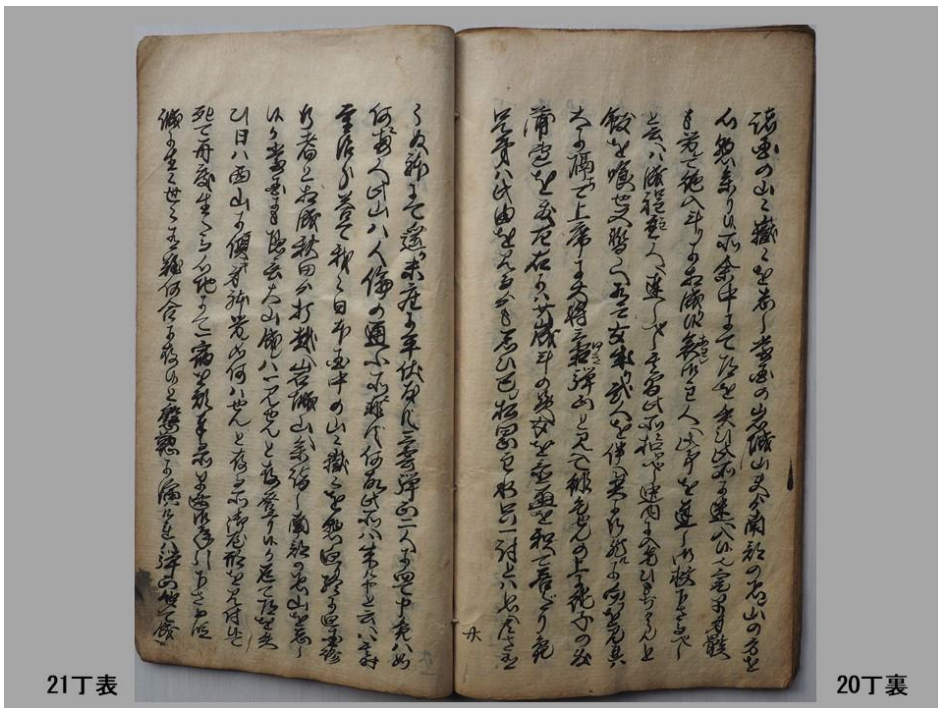


20丁表

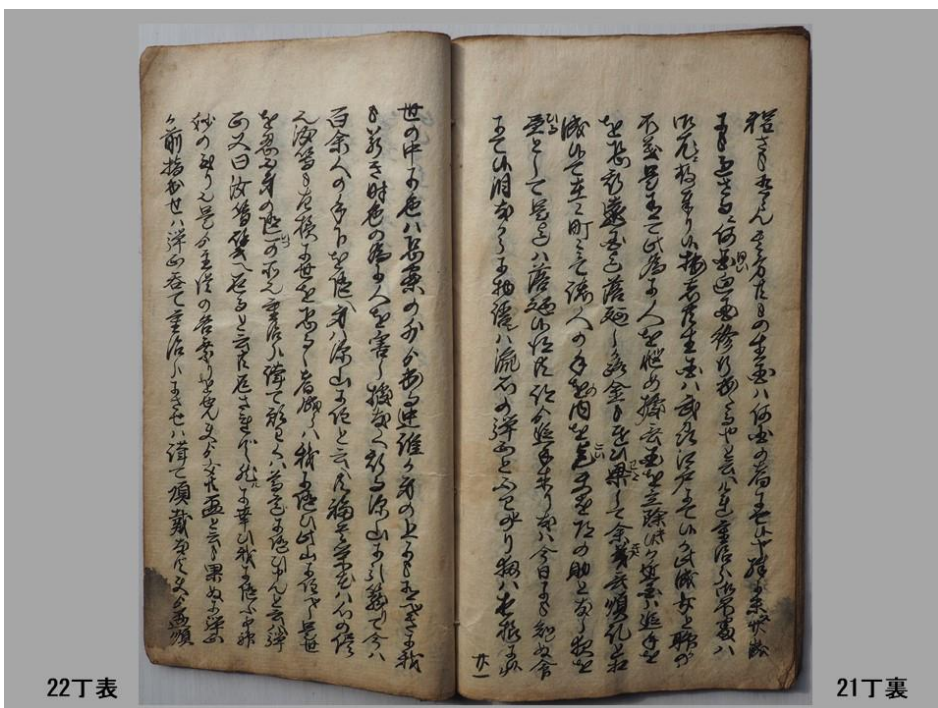
19丁裏

(写真 20)

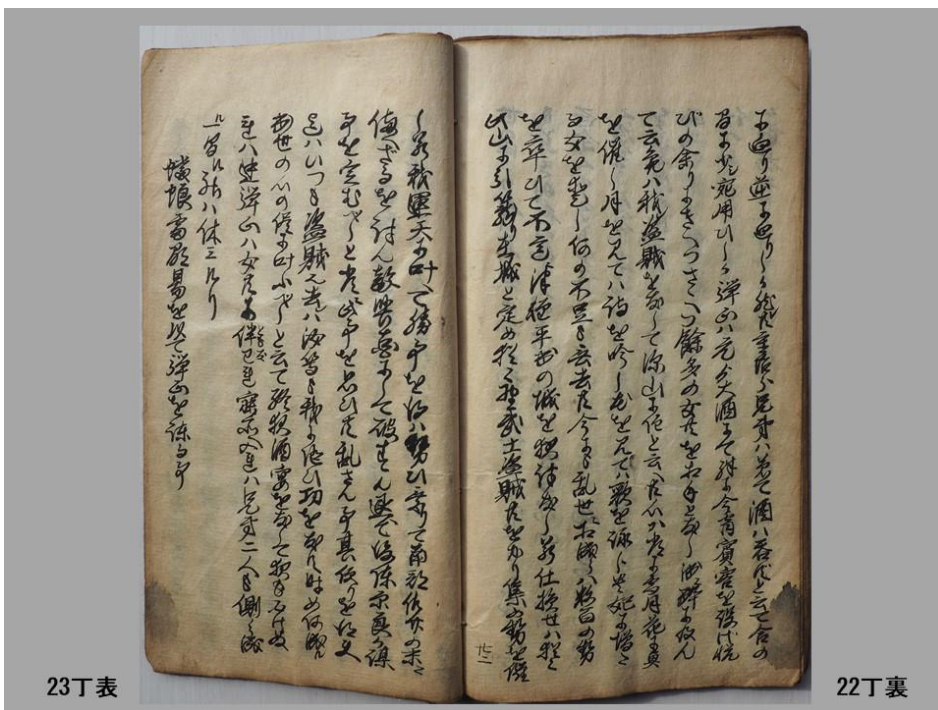




(写真 21)



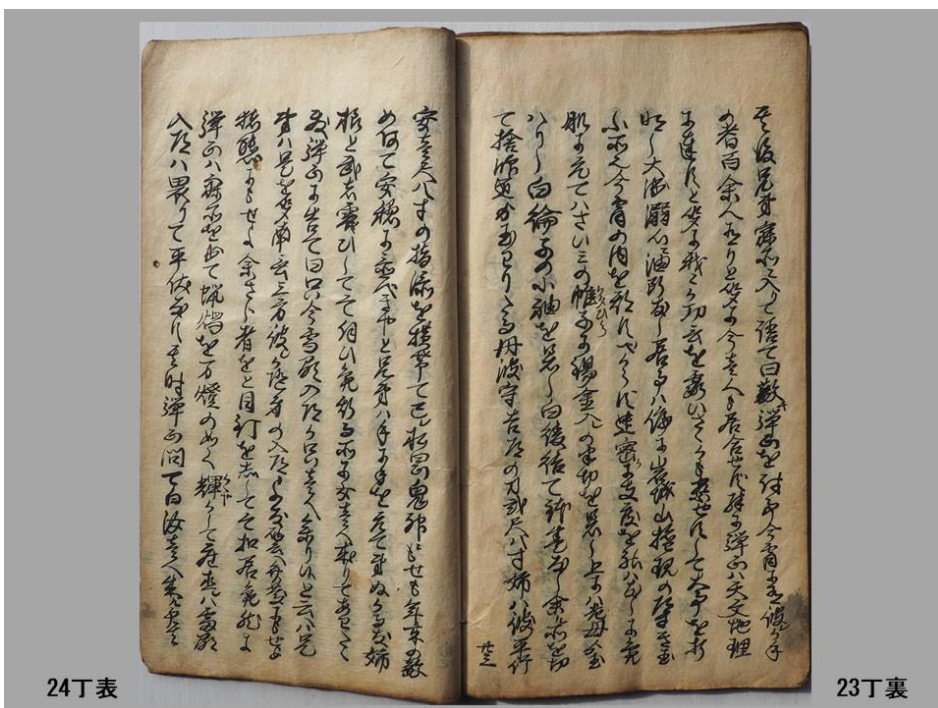
(写真 22)



23丁表

22丁裏

(写真 23)

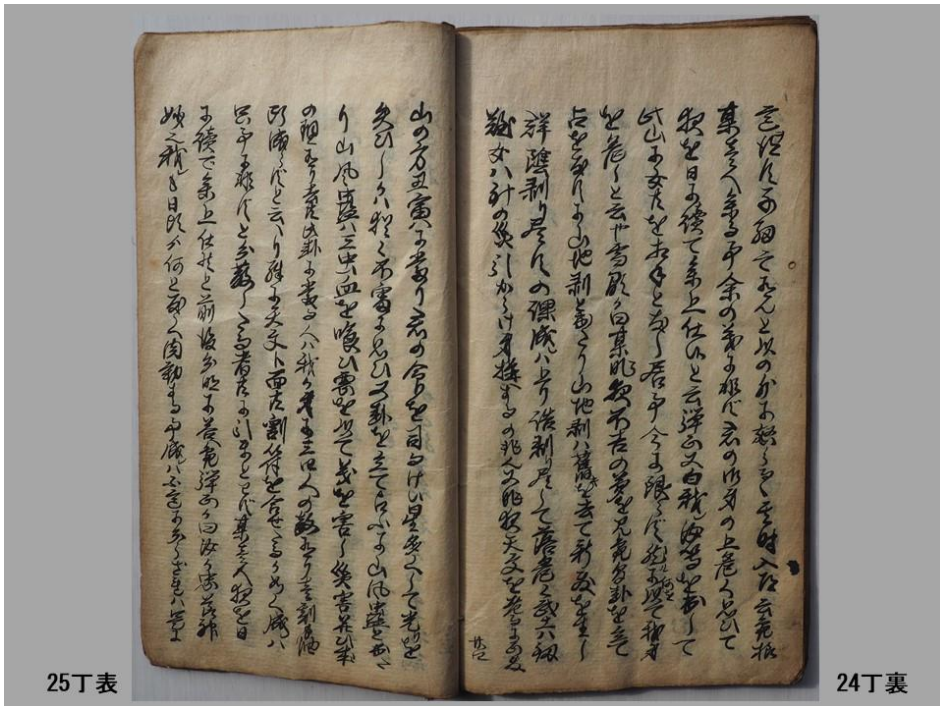


24丁表

23丁裏

(写真 24)



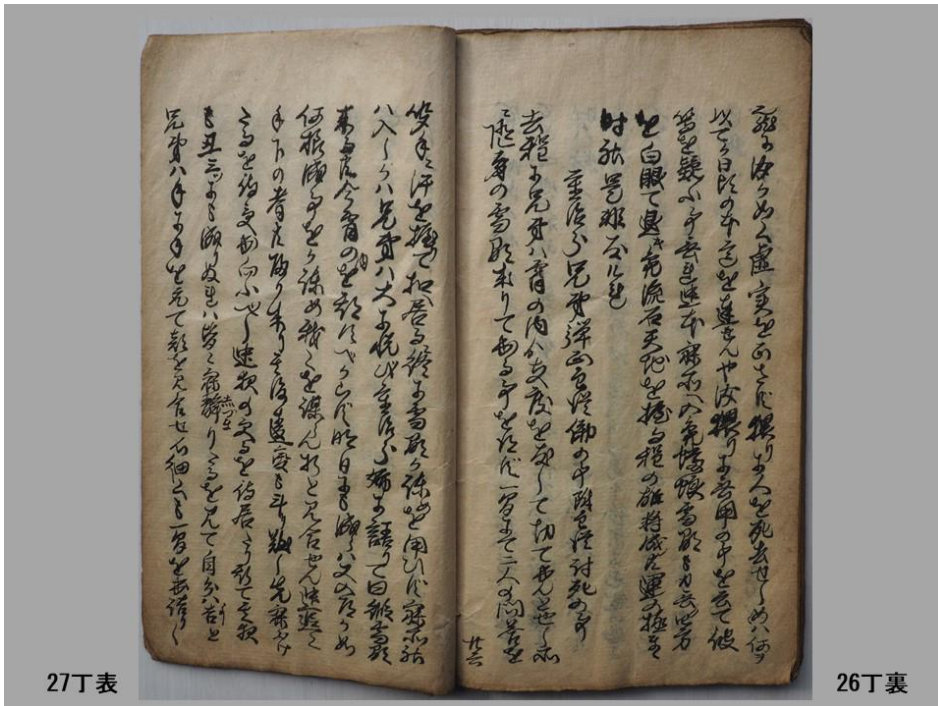


(写真 25)

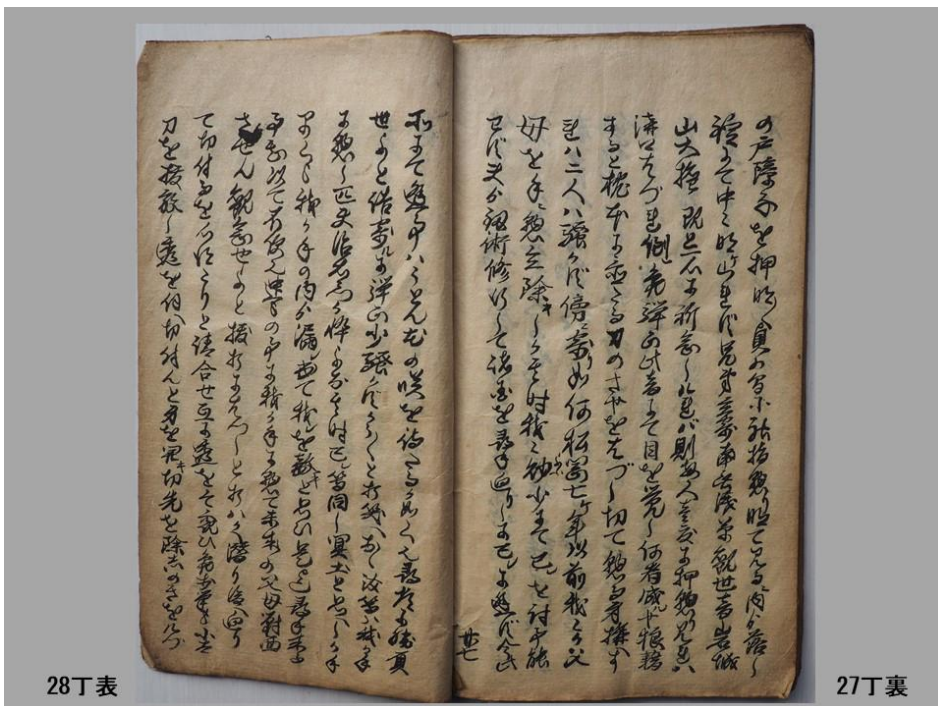


(写真 26)

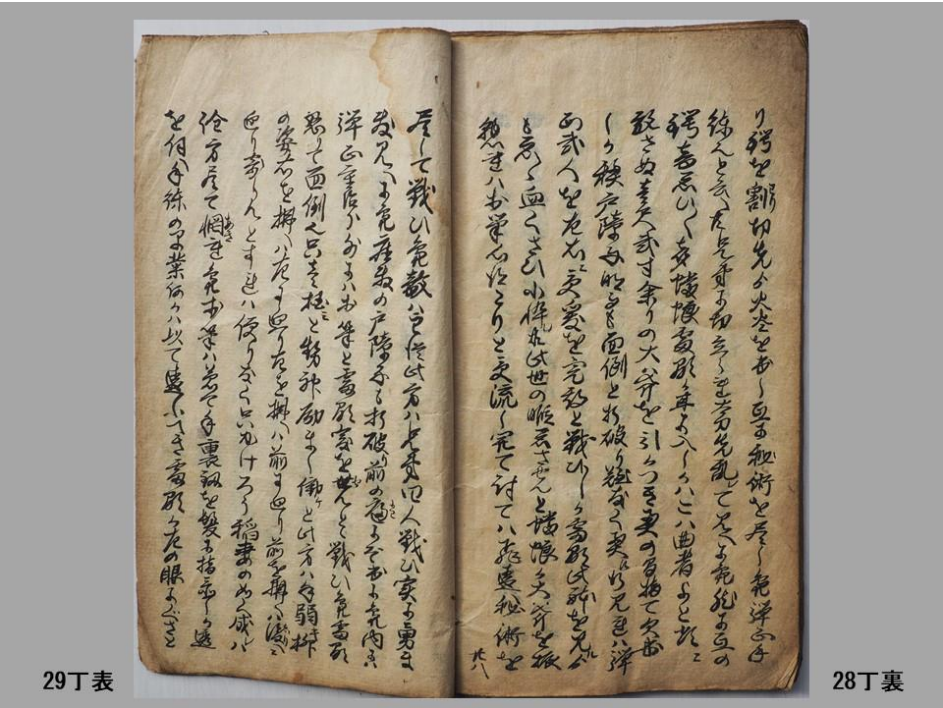




(写真 27)



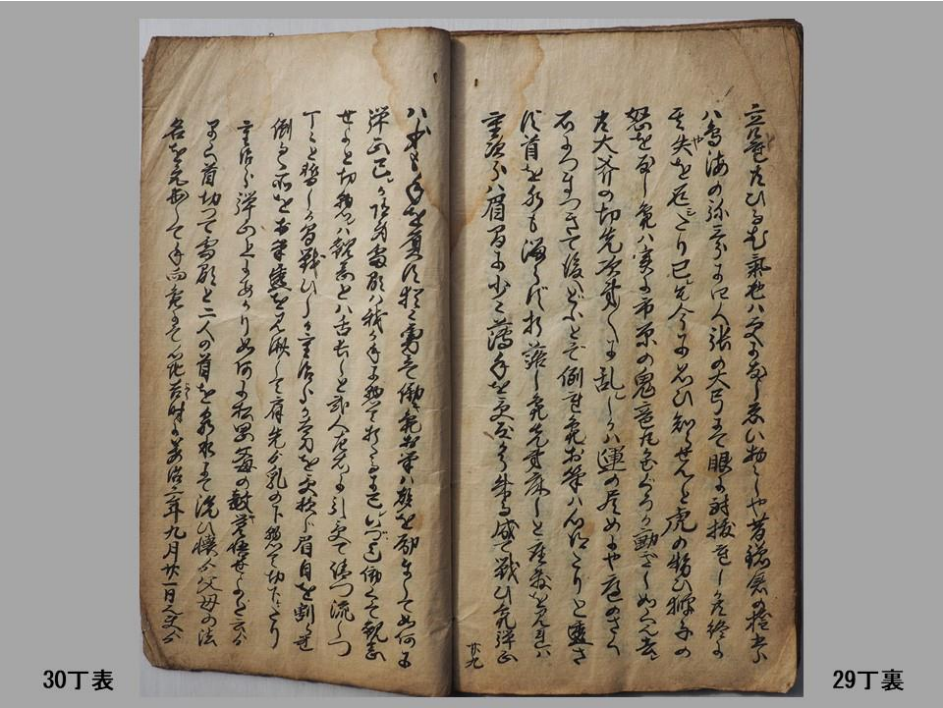
(写真 28)



29丁表

28丁裏

(写真 29)

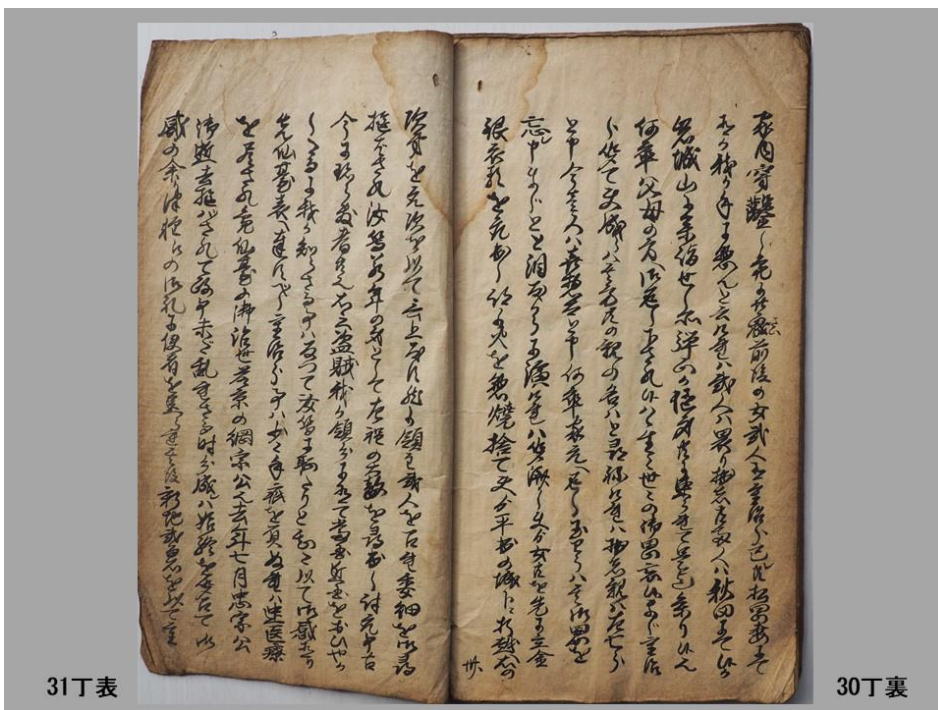


30丁表

29丁裏

(写真 30)

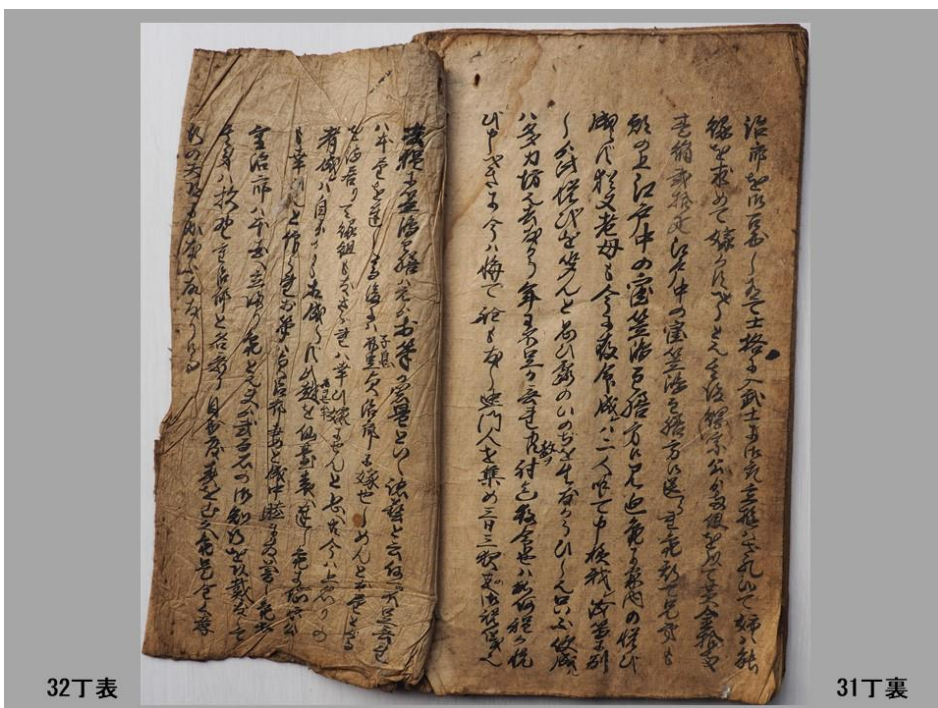




31丁表

30丁裏

(写真 31)



32丁表

31丁裏

(写真 32)



(写真 33)

#### 註

- <sup>1</sup> 廣瀬誠『立山のいぶき—万葉集から近代登山事始めまで』（シー・エー・ピー、1992年）。
- <sup>2</sup> 富山県〔立山博物館〕編『文学にみる立山』（富山県〔立山博物館〕、2012年）。
- <sup>3</sup> 拙稿「十返舎一九著『越中楯山幽霊邑讐討』の研究（その1）」（『北陸大学紀要第49号』所収、北陸大学、2020年）。
- <sup>4</sup> 拙稿「十返舎一九著『越中楯山幽霊邑讐討』の研究（その2）」（『北陸大学紀要第50号』所収、北陸大学、2021年）。
- <sup>5</sup> 拙稿「川と海から見た立山信仰」『とやま民俗 No92』（5頁～11頁、富山民俗の会、2019年）。
- <sup>6</sup> 千葉県館山市畑・山田幸男家所蔵。對馬郁夫『房総に息づく出羽三山信仰の諸相』（19頁、對馬郁夫発行、2011年）。千葉県安房郡鋸南町保田から出発の道中記。
- <sup>7</sup> 埼玉県深谷市・御嶽講の講元家所蔵。深瀬央道・中山郁『御嶽山丸江元講 宝物拝見記』（72頁～74頁、御嶽山丸江元講講元柴崎永雄監修、SANDAL 舎編、御嶽教滋賀大教会教会長岡本康成発行、2009年）。武蔵国武州播磨郡下江原村柴崎仙左衛門の道中記。
- <sup>8</sup> 狭山市立博物館所蔵。『道中日記の世界—江戸時代の旅と信仰—』（狭山市立博物館、1998年）。
- <sup>9</sup> 『室堂・玉殿窟（立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（1））』（50頁、富山県〔立山博物館〕、1997年）。
- <sup>10</sup> 「立山寄付券記」『越中立山古文書』（221頁、立山開発鉄道株式会社、1962年）。
- <sup>11</sup> 註9参照。『室堂・玉殿窟（立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（1））』（50頁）。